

# 寿昌寺西遺跡第1次調査

2018年

島根大学 研究・学術情報機構 総合博物館



## 序 文

旧国立島根大学（現国立大学法人島根大学松江キャンパス）の敷地内は、以前より周知の埋蔵文化財包蔵地だったことから、平成6年4月に島根大学埋蔵文化財調査研究センターが発足し、文化財保護法に準拠して構内埋蔵文化財の継続的・組織的な発掘調査研究が進められてきました。そして平成15年10月には、旧国立島根大学と旧国立島根医科大学が合併し新たな島根大学となり、それぞれの敷地は、松江市西川津町の島根大学松江キャンパスと出雲市塩冶町の同大学出雲キャンパスとなりました。その結果、当センターが調査対象とする構内埋蔵文化財の範囲が倍増することになりました。さらに平成18年4月、島根大学埋蔵文化財調査研究センターは島根大学ミュージアム（平成30年6月、総合博物館に改称）へと発展的に改組され、構内埋蔵文化財の調査研究機能を引き継ぐ一方で、こうした研究成果を活かした教育普及・展示活動にも取り組んできたところです。

本書は、平成26年3月、出雲キャンパスでの小規模工事に先立って実施した寿昌寺西遺跡第1次発掘調査成果の研究報告書です。この調査では、現地表より約3m以上も下に堆積した砂層から弥生土器を中心とする遺物が出土しました。見つかった遺物は、弥生中期後葉から後期後葉頃を中心とするもので、河川の洪水によって付近から流されてきたものであることから、出雲キャンパス内の野球場・テニスコート一帯や隣接地にムラが存在していたと考えられています。この時期は、著名な荒神谷遺跡の大量青銅器埋納や西谷墳墓群の造営時期とも重なります。今後の継続的な発掘調査によって、遺跡の広がりや詳細の解明を進めてまいりたいと考えています。

なお、発掘調査の開始以来、本書刊行に至るまで、島根県教育委員会・出雲市文化財課をはじめ、各方面から多大な御協力、御支援を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成30年11月

島根大学研究・学術情報機構総合博物館館長

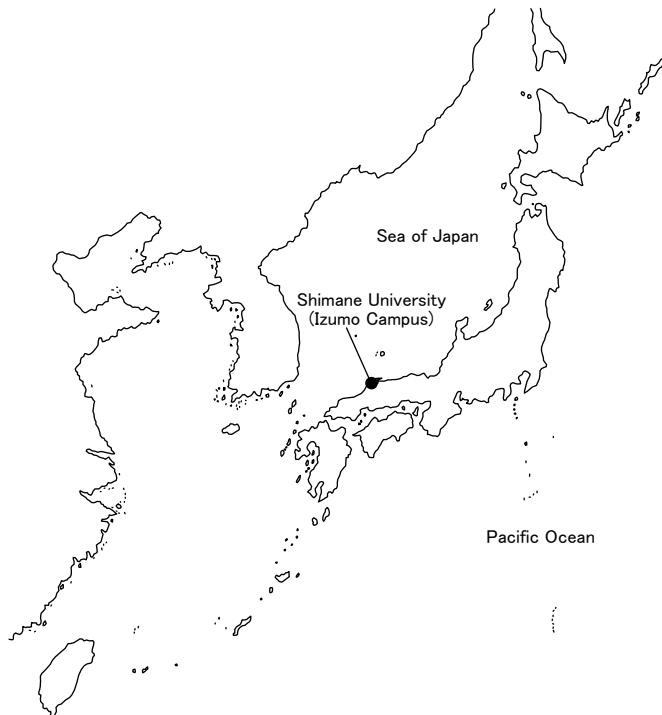
入月俊明

## 例　　言

1. 本書は、島根県出雲市塩冶町 89-1 島根大学出雲キャンパス構内 (CM ~ CN・136 ~ 137 グリッド)において実施した寿昌寺西遺跡第1次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、防火水槽の埋設工事に伴い実施した。
3. 発掘調査は、調査期間 2014 (平成 26) 年 3 月 10 日～3 月 17 日、調査面積約 38.9 m<sup>2</sup>である。
4. 発掘調査は、島根大学情報機構ミュージアム(平成 30 年 6 月、総合博物館に改称)が実施した。体制は第 1 章に示している。
5. 本書中に示した方位・座標値は、世界測地系・平面直角座標系Ⅲによった。標高は、T.P. (東京湾平均海面高度) による。
6. 使用土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
7. 遺物の洗浄・実測、遺構・遺物の製図は、田中浩子・会下和宏が行った。
8. 本書の原稿執筆は会下があたった。
9. 本書の構成・編集は会下が行い、田中が協力した。
10. 出土遺物と発掘調査に関わる記録類は、すべて島根大学研究・学術情報機構総合博物館で保管している。
11. 調査および本書作成にあたって、下記の方から有益なご協力・ご指導を賜った。記して御礼申し上げます。

石田爲成 (岡山県教育委員会) 角田徳幸 (島根県教育委員会) 宮道年弘 (出雲市文化財課)  
三原一将 (出雲市文化財課)

(敬称略)



## 目 次

第1章 調査に至る経緯と組織	1
1 調査に至る経緯と遺跡の認定	1
2 調査研究組織（平成25年度）	1
第2章 遺跡の環境	4
1 地質構成と自然史	4
2 歴史的環境	6
第3章 島根大学出雲キャンパスの既往試掘調査成果	10
第4章 調査の方法と経過	17
1 調査の方法と構内座標の設定	17
2 調査の経過	18
第5章 基本層序	19
第6章 遺物	21
1 第3層の遺物	21
(1) 縄文土器	21
(2) 弥生土器	21
(3) 土師器	25
(4) 羽口	25
(5) 自然遺物	25
2 第2層の遺物	25
3 第1層の遺物	25
第7章 まとめ	29

## 挿 図 目 次

図1 調査区位置図（1/3,000）	2
図2 調査区位置図（大学敷地造成以前、1/3,000）	3
図3 出雲平野周辺の地質（1/150,000、鹿野ほか2007を一部改変して作成）	5
図4 島根大学出雲キャンパス周辺の主な遺跡（1/60,000）	7
図5 04 試掘トレンチ西壁断面図（1/80）	11
図6 06 試掘トレンチ西壁断面図（1/80）	11
図7 07 試掘トレンチ西壁断面図（1/80）	12
図8 08 試掘トレンチ北壁断面図（1/80）	13
図9 08-2 試掘トレンチ西壁断面図（1/80）	14
図10 09 試掘トレンチ北壁断面図（1/80）	14
図11 12 試掘トレンチ西壁断面図（1/80）	15

図 12	13 試掘トレンチ西壁断面図 (1/80).....	15
図 13	14-A 試掘トレンチ北壁断面図 (1/80).....	16
図 14	調査区平面図 (1/80).....	17
図 15	東壁断面図 (1/40).....	20
図 16	第3層出土遺物 (その1、1/3).....	22
図 17	第3層出土遺物 (その2、1/3).....	23
図 18	第3層出土遺物 (その3、1/3).....	24
図 19	第1・2層出土遺物 (1/3).....	25

## 表 目 次

表 1	遺跡周辺における古植生.....	6	表 10	08-1W 試掘トレンチ.....	13
表 2	島根大学出雲キャンパス 既往試掘調査一覧.....		表 11	08-2 試掘トレンチ.....	14
表 3	04 試掘トレンチ.....	10	表 12	09 試掘トレンチ.....	14
表 4	06-A 試掘トレンチ.....	11	表 13	12 試掘トレンチ.....	15
表 5	06-B 試掘トレンチ.....	11	表 14	13 試掘トレンチ.....	15
表 6	07-A 試掘トレンチ.....	12	表 15	14-A 試掘トレンチ.....	16
表 7	07-B 試掘トレンチ基本層序.....	12	表 16	第1次調査区基本層位.....	20
表 8	08-1E 試掘トレンチ.....	13	表 17	遺物観察表.....	26
表 9	08-1C 試掘トレンチ.....	13	表 18	寿昌寺西遺跡周辺の弥生集落の変遷	29

## 図 版 目 次

図版 1	遺跡	1 調査風景 (南西から) 2 調査区全景 (西から)
図版 2	遺跡	1 東壁断面 (南東から) 2 弥生土器出土状態 (第3層)
図版 3	遺跡	1 弥生土器出土状態 (第3層) 2 自然礫出土状態 (第3層、南から)
図版 4	遺物	1 第3層出土遺物 (1/3) 2 同上 (1/3)
図版 5	遺物	1 第3層出土遺物 (1/3) 2 同上 (1/3)
図版 6	遺物	1 第3層出土遺物 (1/3) 2 第1・2・3層出土遺物 (1/3)

# 第1章 調査に至る経緯と組織

## 1 調査に至る経緯と遺跡の認定

島根大学ミュージアム（平成30年6月、総合博物館に改称）は、平成17年度まで島根大学埋蔵文化財調査研究センターが担ってきた業務を引き継ぐ形で、平成18年度以降、島根大学構内全域における開発工事に際して、該当箇所の埋蔵文化財取り扱いについての対応を担ってきた。現島根大学出雲キャンパスにおいても、平成15年10月の旧国立島根大学と旧国立島根医科大学の合併に伴い島根大学構内となったことから、本組織が埋蔵文化財保存業務にあたってきたところである。

本書で報告する寿昌寺西遺跡第1次発掘調査は、出雲キャンパス敷地内における防火水槽埋設工事を原因として実施したものである。当工事は、7.2 m × 5.4 mの範囲を地表下約4.0 mまで掘削する計画だったため（図1・2）、事前に埋蔵文化財の有無を確認しておく必要が生じた。

出雲キャンパスでは、これまで継続的な試掘調査を実施してきたが、平成17年度の試掘調査の際、キャンパス北東側で弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土した以外は、近現代水田耕作土である盛土層（第1層）よりも下位からは遺物包含層が検出されていなかった（第3章参照）。しかし、キャンパス南東側が調査の対象となるのは今回が最初であり、何らかの埋蔵文化財の存在が期待された。

以上の経緯を経て、2014（平成26）年3月10日から発掘調査を開始した。なお調査の結果、一帯における遺跡の存在が明らかとなった。島根県教育委員会・出雲市文化財課とも協議した結果、当調査区の遺跡は構内東隣に存在する周知の埋蔵文化財包蔵地である寿昌寺西遺跡と一連のものである可能性が高いことが想定された。そこで本地点の調査を寿昌寺西遺跡第1次調査とした。

## 2 調査研究組織（平成25年度）

### 学術情報機構ミュージアム 運営会議

委員長 教育学部	教授 林 正久	教 授 佐々木愛
委 員 副館長・ミュージアム 教育学部	准教授 會下和宏 教 授 藤田英樹	法文学部 医学部
生物資源科学部	教 授 宮永龍一	総合理工学研究科 総合情報処理センター長
附属図書館長	教 授 田籠 博	教 授 高須 晃 教 授 會澤邦夫
生涯教育推進センター長	教 授 多々納道子	学術国際部情報企画課長 塩田芳夫

### 学術情報機構ミュージアム 埋蔵文化財専門委員会

委員長 館 長	林 正久	教 授 大橋泰夫
委 員 副館長・ミュージアム 法文学部	准教授 會下和宏 准教授 岩本 崇	法文学部 法文学部
法文学部	准教授 平郡達哉	医学部
総合理工学研究科	教 授 三瓶良和	総合理工学研究科
調査員 ミュージアム	准教授 會下和宏	准教授 酒井哲弥 調査補助員 情報企画課 田中浩子

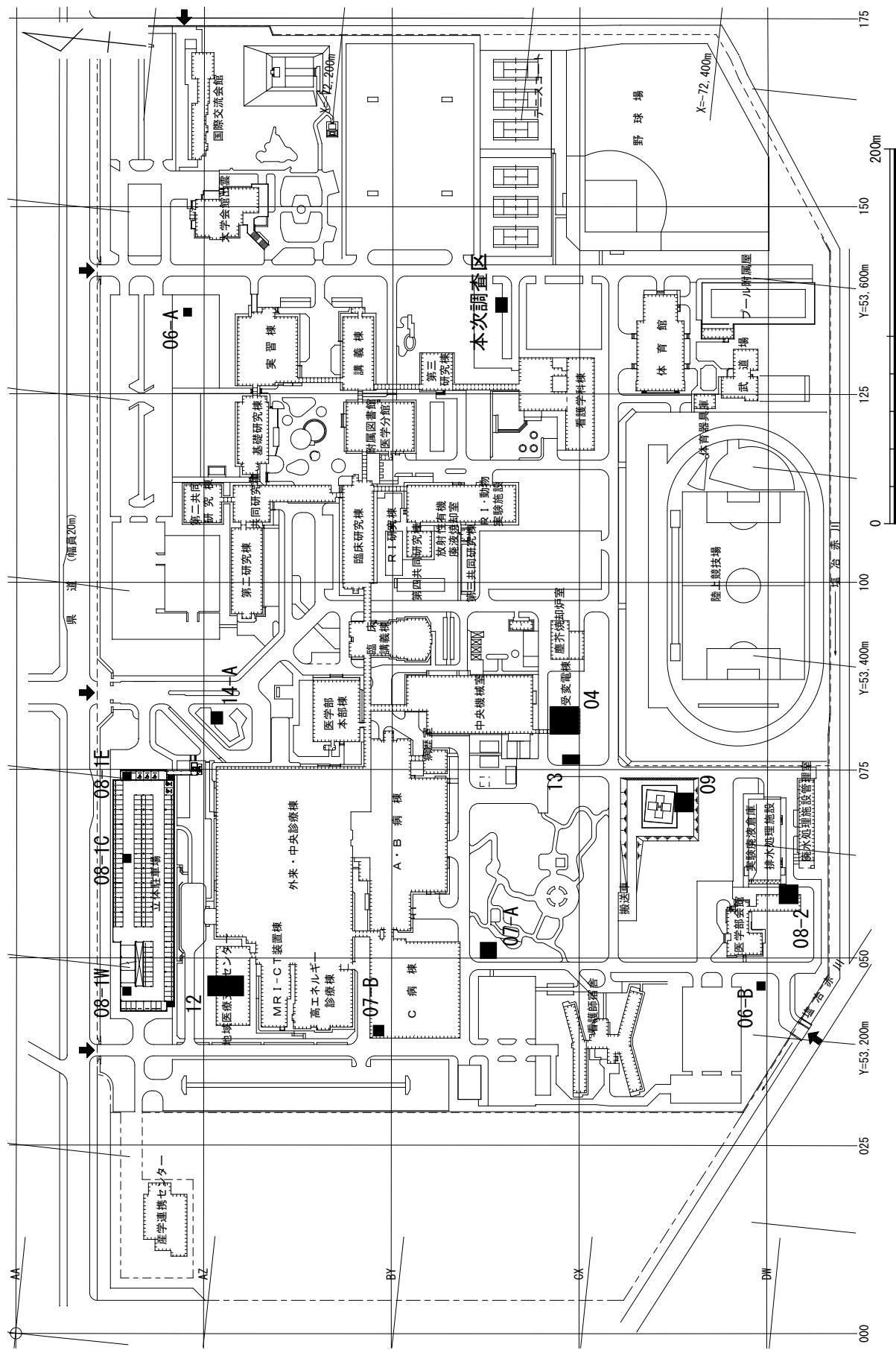


図 1 調査区位置図 (1/3,000)

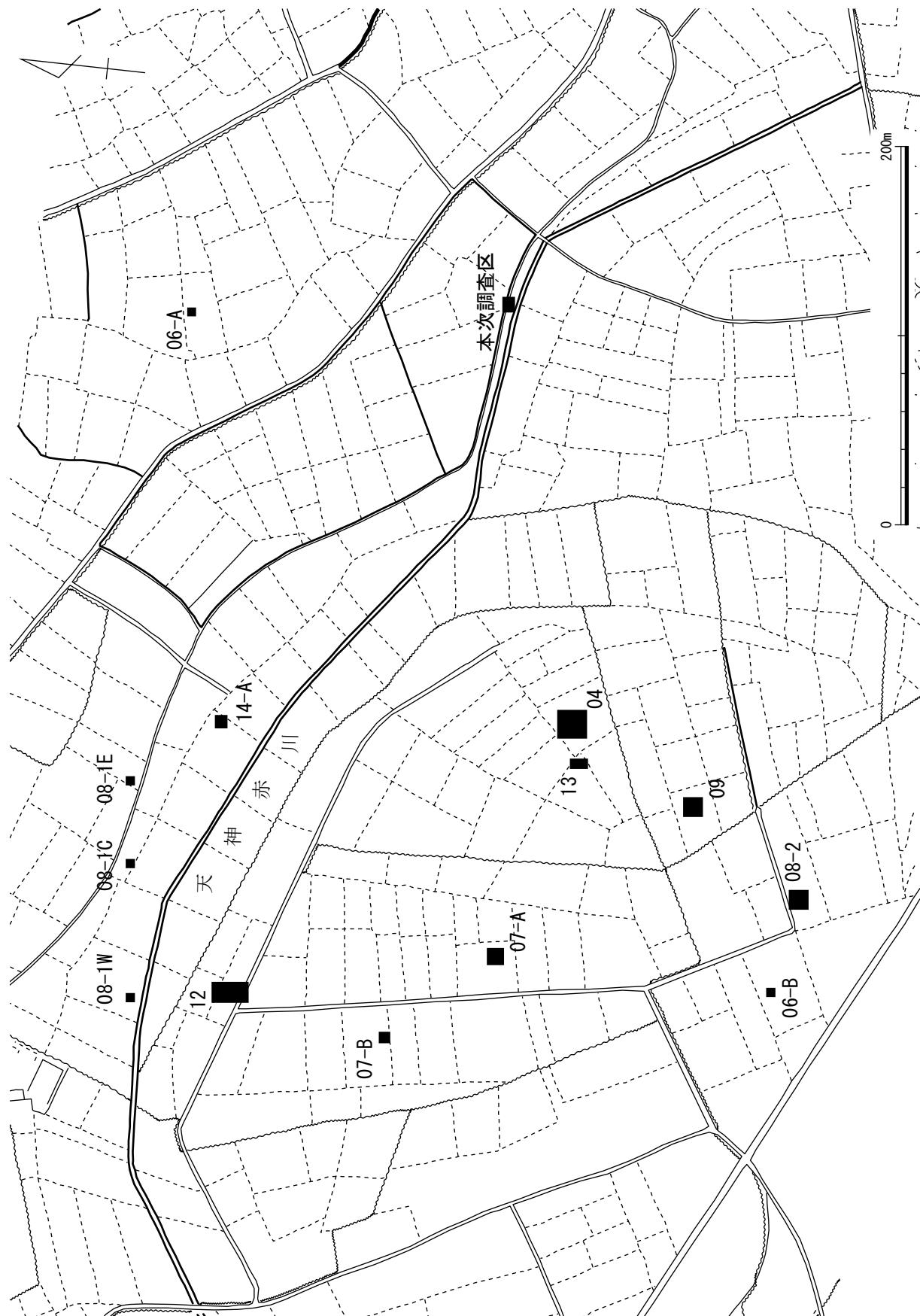


図2 調査区位置図（大学敷地造成以前、1/3,000）

## 第2章 遺跡の環境

### 1 地質構成と自然史

本遺跡が所在する出雲市は、大別的には、日本海に臨む北部の島根半島、宍道湖・神西湖などの汽水域および出雲平野低地部、南部の中国山地によって構成される（図3）。島根半島には、前期中新世の成相寺層や中期中新世の牛切層・古江層などが分布しており、約1200万年前以降の褶曲運動を伴う隆起によって急峻な丘陵地形が形成されている（高安ほか1992、高安2001）。宍道湖・神西湖は、後氷期における海水準変動の関与によって、三角州や砂洲が内湾を閉塞した海跡湖で、その過程については、時代ごとの具体的な古地形が復元されている（徳岡ほか1996、林1996、田中1996、高安2000）。縄文海進期の本地域は、概略的には、現在の宍道湖が大社湾と繋がった古宍道湾があり、その沿岸部は、浅海性砂泥底で樹枝状のおぼれ谷が形成されていた。

本遺跡は、神戸川が中国山地から現在の出雲平野に流れ出た場所の右岸に位置している。神戸川の流域には、白亜系から古第三系の花崗岩類、新第三系の火山岩類・堆積岩類が分布する。また、神戸川上流部にある三瓶山は、後期更新世から完新世にかけて噴火活動を行っている。このうち縄文時代には、第V期（4,300～4,800yBP）と第VI期（3,600～3,800yBP）の活動期が知られており、後述のように遺跡が立地する沖積地の形成にも深く関与している（松井・井上1971）。

また、本遺跡周辺における古環境変遷については、これまでに行われた三田谷I遺跡・築山遺跡・藤ヶ森南遺跡などの調査研究によって復元されつつある。その様相は、以下の通りである。

**縄文前期から中期初頭** 三田谷I遺跡（図4-52）では、三瓶火山第V期活動の噴出物が引き金となった、神戸川による数回の洪水堆積物と考えられる火山灰質砂層・火山灰質シルト層（D層）が検出されている（中村・渡辺2000）。

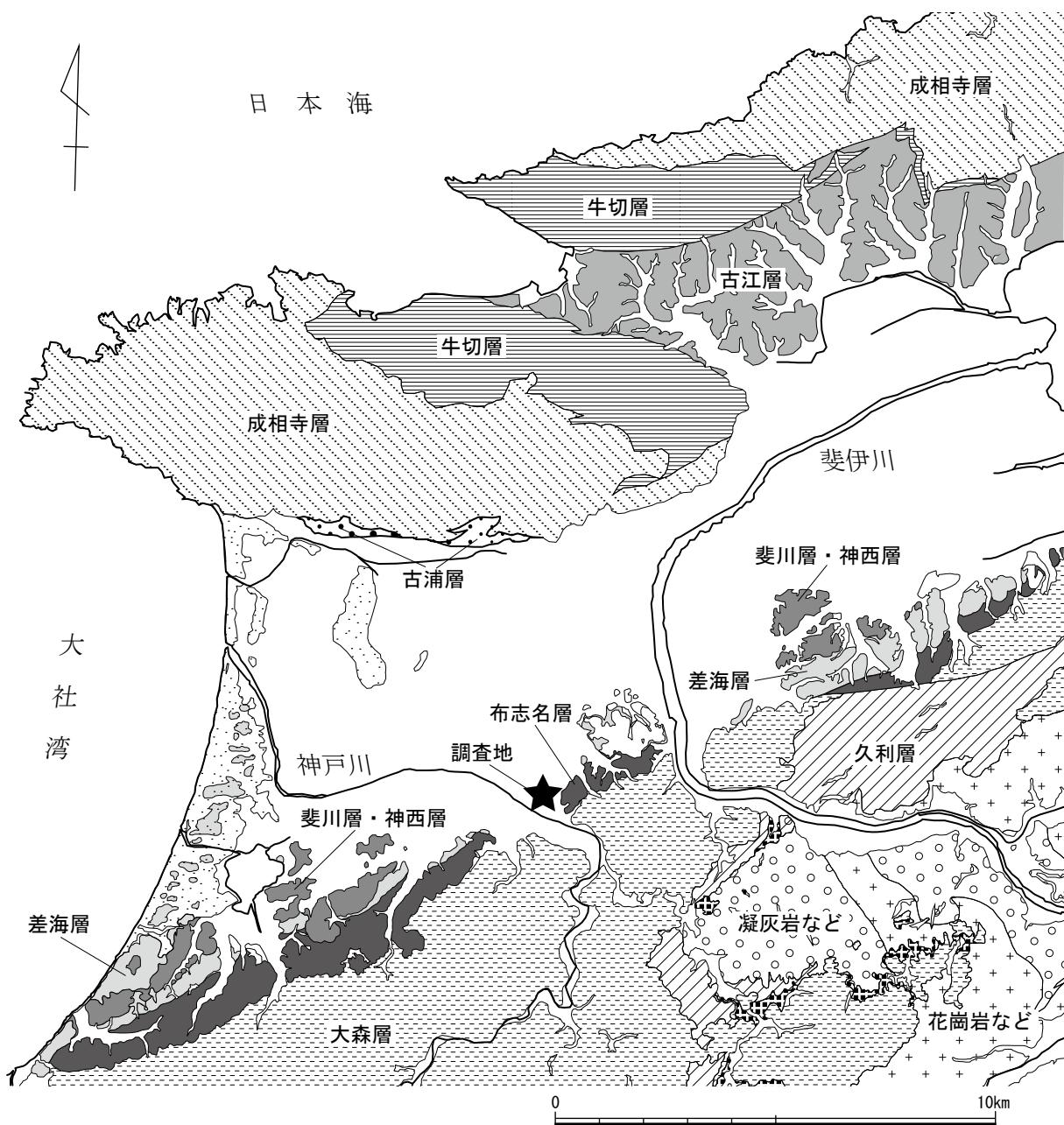
**縄文後期頃** 三田谷I遺跡の花粉分析では、縄文後期前半にかけてアカガシ亜属が卓越する結果を示している（三田谷I遺跡III帶、中村・渡辺2000）。縄文後期前半には、三瓶火山第VI期活動の噴出物が引き金となった、神戸川による数回の洪水堆積物（B層）によって林が埋没するという地質学的イベントが確認されている（中村・渡辺2000）。

築山遺跡（図4-47）でも、三瓶火山第VI期活動時の火碎流堆積物である「第1ハイカ層」が確認されている。「第1ハイカ層」の直前は、背後の丘陵においてカシ類を要素とする照葉樹林、丘陵縁辺にはアカマツやナラ類を要素とする遷移林が分布し、遺跡近辺の林床や草地には、キク科・アカザ科・ヒユ科・カヤツリグサ科の草本が茂っていたと考えられている（渡辺2005）。

**奈良時代** 藤ヶ森南遺跡（図4-33）では、背後の丘陵などにアカマツ林ないしクロマツ林、およびカシ類などの照葉樹林、谷沿いにスギ林が分布していたと考えられる（渡辺1999）。イネ科の花粉やイネのプラント・オパールが高率で検出されることから、水田が営まれていた。

**中世** 藤ヶ森南遺跡周辺では、照葉樹林・スギ林が減少し、アカマツ林ないしクロマツ林が二次林として拡大していったと考えられる（渡辺1999）。遺跡周辺は水田が広がる景観にあった。

**近世** 藤ヶ森南遺跡や築山遺跡では、周辺丘陵や中国山地縁辺などにアカマツ林ないしクロマツ林、ナラ類が二次林として広く分布し、里山を形成していた（渡辺1999、渡辺2004）。



#### 完新世

△ 三角州、扇状地、低湿地堆積物及び河川堆積物

□ 砂州・海浜堆積物、海岸砂丘堆積物

#### 後期更新世

△ 差海層

#### 中期中新世

■ 古江層 ▲ 牛切層 ■ 斐川層・神西層 ■ 布志名層 ■ 大森層

#### 前期中新世

△ 成相寺層 □ 古浦層 ▲ 久利層 ■ 川合層

#### 暁新世

■ 花崗岩など

#### 後期白亜紀

○ △ 凝灰岩など

図3 出雲平野周辺の地質(1/150,000、鹿野ほか2007を一部改変して作成)

表1 遺跡周辺における古植生

花粉分帯名ほか	時期	花粉分析	文献
三田谷Ⅰ遺跡IV帶	縄文早期末～中期初頭のどこか：E層（最上部4,820 ± 40yBP）	マツ属（複維管束亜属）・スギ属・アカガシ亜属・コナラ亜属・ムクノキ属・エノキ属・ニレ属－ケヤキ属高率。	中村・渡辺 2000
三田谷Ⅰ遺跡III帶	縄文中期～後期前半：C層（最上部3,700 ± 40yBP）	アカガシ亜属卓越。	
築山遺跡H14・IV帶	縄文後期（3,690 ± 50yBP）	アカガシ亜属・マツ属（複維管束亜属）卓越。	渡辺 2004
築山遺跡H15・1区	第1ハイカ層・4層（下位の古土壌3,700 ± 40yBP）：縄文後期	マツ属（複維管束亜属）・スギ属・アカガシ亜属卓越。	渡辺 2005
築山遺跡H14・III帶	弥生～中世	マツ属（複維管束亜属）・スギ属・アカガシ亜属・コナラ亜属卓越。	渡辺 2004
藤ヶ森南遺跡III帶	～奈良	マツ属（複維管束亜属）・スギ属卓越。イネ科高率。	
藤ヶ森南遺跡II帶	中世	マツ属（複維管束亜属）増加。	渡辺 1999
藤ヶ森南遺跡I帶	近世～	マツ属（複維管束亜属）著しく高率。	
築山遺跡H14・II帶	近世～近代？	マツ属（複維管束亜属）卓越。	渡辺 2004

## 2 歴史的環境（図4）

以下、本遺跡が所在する出雲平野南部ないし神戸川流域を中心に遺跡の展開を概述する。

**縄文時代** 出雲平野一帯やその周辺丘陵などで縄文早期から前期の遺物が出土する遺跡は、上長浜貝塚（55、川上ほか1996）・菱根遺跡（4、酒詰ほか1959）・山持遺跡6区（13、原田2009）・同遺跡6・7区（東山ほか2012）・三田谷Ⅲ遺跡（53、伊藤2000）・間谷西古墳群（60、今岡2009）などがある。いずれも平野の中央部ではなく、平野周辺部や周辺丘陵などに分布しており、現在の出雲平野中央部が、この時期には縄文海進によって水域化し、まだ安定した陸域になつていなかつたことを反映している。

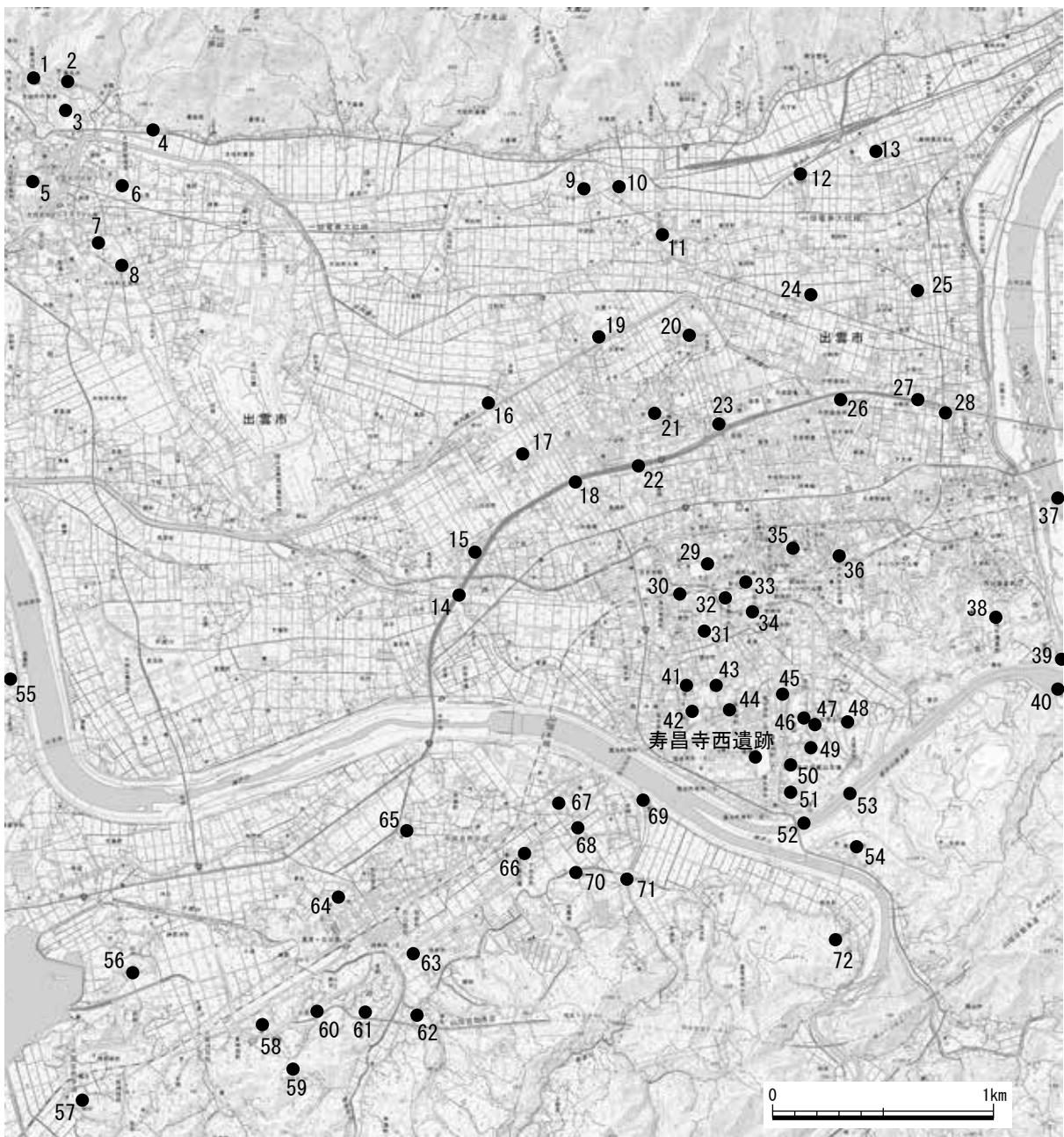
出雲平野中央部において本格的に遺跡が出現してくるのは、縄文後期以降である。壱丁田遺跡（坂本2008）・矢野遺跡（19、池田ほか1987、坂本ほか2010）では、縄文後期の土器が出土している。つづく晩期にいたるとさらにお土遺跡数が増加する。この頃から河川による沖積作用によって、より安定した陸域が形成され、人間活動が活発化していったことが分かる。

本遺跡の近隣では、東側にある築山遺跡において、縄文後期から晩期の土器・石鏃・楔形石器・剥片・磨石・敲石・石皿・打製石斧・石錐・土製円盤などが出土している（47、遠藤ほか2004、米田ほか2005）。これらは、上記した三瓶山起源の火碎流堆積物である「第1ハイカ層」堆積（3,600-3,800yBP）によって新たに形成された沖積段丘上における人間活動の結果である。

**弥生時代** 本遺跡周辺では、三田谷Ⅰ遺跡において、突帯文土器に伴って板付I式系壺形土器が出土している（52、鳥谷編2000）。また、本遺跡東隣の築山遺跡では、弥生前期から後期までの土器・打製石斧・磨製石斧などがみられる（米田ほか2005、米田ほか2007など）。

本遺跡周辺において集落遺跡が増加するのは、特に弥生中期中葉頃以降である。例えば、神戸川左岸の古志本郷遺跡（69）・下古志遺跡（67）・田畠遺跡（68）では、弥生中期中葉頃以降に複数の大溝の掘削が始まり、古墳前期頃まで機能していた（三原ほか2002など）。神戸川右岸では、本遺跡から北西約1.7kmにある天神遺跡でも弥生中期中葉以降の複数の大溝が検出されている（30、岸1997ほか）。こうした集落遺跡は、神戸川によって形成された微高地上に立地する。

**古墳時代** 6世紀後葉頃になると、出雲平野のなかでも階層最上位の墳墓に位置付けられる上



**【出雲大社周辺】**

1. 出雲大社境内遺跡
2. 真名井銅戈出土地
3. 五反配遺跡
4. 菱根遺跡
5. 鹿藏山遺跡
6. 原山遺跡
7. 南原遺跡
8. 中分貝塚
9. 高浜Ⅱ遺跡
10. 里方八石原遺跡
11. 高浜Ⅰ遺跡
12. 里方別所遺跡
13. 山持遺跡
14. 余小路遺跡
15. 白枝本郷遺跡
16. 井原遺跡
17. 白枝荒神遺跡
18. 小畠遺跡
19. 矢野遺跡
20. 大塚遺跡
21. 小山遺跡
22. 渡橋沖遺跡
23. 姫原西遺跡
24. 高岡遺跡
25. 荻野古墓
26. 中野美保遺跡
27. 中野清水遺跡
28. 大津町北遺跡
29. 海上遺跡
30. 天神遺跡
31. 高西遺跡
32. 善行寺遺跡
33. 藤ヶ森遺跡
34. 藤ヶ森南遺跡
35. 塚山古墳

**【神戸川右岸・斐伊川左岸】**

36. 大念寺古墳
  37. 斐伊川鉄橋遺跡
  38. 西谷墳墓群
  39. 来原岩桶
  40. 長廻遺跡
  41. 弓原遺跡
  42. 塩治小学校附近遺跡
  43. 神門寺境内墓
  44. 神門寺附近遺跡
  45. 宮松遺跡
  46. 上塙治築山古墳
  47. 築山遺跡
  48. 上塙治横穴墓群第3・4支群
  49. 寿昌寺遺跡
  50. 地蔵山古墳・池田遺跡
  51. 半分古墳・半分遺跡
  52. 三田谷Ⅰ遺跡
  53. 三田谷Ⅲ遺跡
  54. 光明寺古墳群
  55. 上長浜貝塚
  56. 山地古墳
  57. 田中谷貝塚
  58. 九景川遺跡
  59. 北光寺古墳
  60. 間谷西古墳群
  61. 浅柄Ⅱ遺跡
  62. 保知石遺跡
  63. 浅柄遺跡
  64. 神門横穴墓群
  65. 知井宮多聞院遺跡
  66. 宝塚古墳
  67. 下古志遺跡
  68. 田畠遺跡
  69. 古志本郷遺跡
  70. 妙蓮寺山古墳
  71. 放れ山古墳
  72. 刈山古墳群
- 【神戸川左岸】**

図4 島根大学出雲キャンパス周辺の主な遺跡 (1/60,000)

塩治築山古墳が、本遺跡から北東約 550 m の位置に造営される（46、松本編 1999）。本古墳は、全長 14.6 m を測る切石造の横穴式石室を有しており、装飾付大刀・馬具・玉類などが副葬されていた。また、上塩治築山古墳に隣接する築山遺跡では、同時期ないしそれ以降の削平された円墳が 6 基検出されている（原編 2009 ほか）。本遺跡の当調査区から南東約 350 m の位置には、上塩治築山古墳に後続する階層上位の墳墓と目される地蔵山古墳がある（50、川上編 1980）。整美な切石造の石棺式石室を有する円墳で、7 世紀初頭前後から前半頃に位置付けられている（赤沢・広江ほか 1987）。

**奈良・平安時代** 奈良時代の島根大学出雲キャンパス周辺一帯は、『出雲国風土記』に記述された神門郡に比定されている。前述の古志本郷遺跡では、神門郡家の可能性が高い 8 世紀前半から 9 世紀前葉頃の掘立柱建物跡が検出されている（松尾編 2003）。また、古代寺院に関わる遺跡としては、一部の礎石が残り、多量に瓦類が出土した神門寺境内廃寺がある（43、川上・今岡ほか 1985）。

**中世** 本遺跡周辺一帯は、塩治氏の本拠地であったと考えられており（三原 2003）、以下の遺跡も塩治氏との関連性が指摘されている。まず本遺跡の東隣に位置する寿昌寺遺跡では、13 世紀代の掘立柱建物跡や区画溝が検出されている（49、遠藤・藤永 2004）。前述の築山遺跡 4 区・5 区では、15 世紀代の掘立柱建物跡・柵列跡、方形の区画溝などをはじめとした平安時代末から室町時代にかけての遺構が多数検出されたほか、出雲平野内でも卓越した点数を数える 15 世紀を中心とした青磁・白磁などの輸入陶磁器が出土している（原編 2009）。

**近世以降** 近世から近代にかけて本遺跡周辺一帯は、暗渠溝の掘削と水田耕作土の盛土によって、新規の水田開発が進展する。そして 1975（昭和 50）年 10 月、国立島根医科大学の設置が認められ、キャンパス敷地内には 2～4 m にもおよぶ盛土がなされる。その後、大学施設の建設工事が順次進められ、現在にいたっている。

## 参考文献

- 赤沢秀則・広江耕史ほか 1987 『石棺式石室の研究』古代の出雲を考える 6 出雲考古学研究会  
熱田貴保ほか 2000 『三田谷 I 遺跡 Vol. 2』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 8 島根県教育委員会ほか  
池田満雄・足立克己 1987 「出雲市矢野遺跡出土の縄文土器」『島根考古学会誌』第 4 集 pp. 115-120  
伊藤 智 2000 『三田谷 III 遺跡』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 10 島根県教育委員会ほか  
今岡一三 2009 『御崎谷遺跡・間谷東遺跡・浅柄北古墳・間谷西 2 遺跡・間谷西古墳群』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3 島根県教育委員会  
遠藤正樹・藤永照隆 2004 「寿昌寺遺跡の調査」『寿昌寺遺跡・築山遺跡』出雲市教育委員会 pp. 4-87  
遠藤正樹・藤永照隆ほか 2004 「築山遺跡の調査」『寿昌寺遺跡・築山遺跡』出雲市教育委員会 pp. 89-184  
川上 稔編 1980 『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会ほか  
川上 稔・今岡 清ほか 1985 『神門寺境内廃寺』出雲市教育委員会  
川上 稔・湯村 功 1996 『上長浜貝塚』出雲市教育委員会  
岸 道三 1997 『出雲市駅付近連続立体交差事業地内 天神遺跡第 7 次発掘調査報告書』出雲市教育委員会  
酒詰仲男・石部正志 1959 「島根県菱根遺跡発掘報告」『同志社大学人文科学研究所紀要』第 2 号  
坂本豊治 2008 『壱丁田遺跡（2 次調査）』出雲市の文化財報告 3 出雲市文化観光部文化財課

坂本豊治ほか 2010『矢野遺跡』出雲市の文化財報告 10 出雲市教育委員会ほか

鹿野和彦・松浦浩久・宮崎純一・小野三枝子 2007「20万分の1特定観測地域総括地質図『島根県東部』2006年暫定版」  
『地質調査総合センター研究資料集(2006年度)』産業技術総合研究所地質調査総合センター

高安克己・山崎博史・上田哲郎・赤木三郎・松本俊雄・野村律夫・岡田昭明・沢田順弘・山内靖喜・吉谷昭彦 1992「山陰地方の中新統層序と古地理」『地質学論集』37 pp. 97-116

高安克己 2000「大橋川と中海・宍道湖の自然史」『出雲国風土記の研究Ⅱ』島根県古代文化センター調査研究報告書 7 島根県古代文化センター

高安克己 2001「宍道町の地質の成り立ち」『宍道町史 通史編』上巻 宍道町 pp. 103-151

田中義昭 1996「山陰地方における弥生時代の海水準について - 遺跡立地からの検討 -」『島根大学地域資源環境学研究報告』15

徳岡隆夫・中村唯史ほか 1996「島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡」『LAGUNA 汽水域研究』No. 3 pp. 9-11

鳥谷芳雄編 2000『三田谷 I 遺跡 Vol. 3』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 9 島根県教育委員会ほか

中村唯史・渡辺正巳 2000「三田谷 I 遺跡の地下層序と地形発達史」『三田谷 I 遺跡 Vol. 2』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 8 島根県教育委員会ほか pp. 116-127

林 正久 1996「荒神谷遺跡周辺の地形環境」『古代文化研究』第4号 pp. 31-50

原 俊二編 2009『築山遺跡III』出雲市の文化財報告 5 出雲市教育委員会ほか

原田敏照 2009『山持遺跡 vol. 5(6区)』国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7 島根県教育委員会

東山信治・伊藤 智ほか 2012『山持遺跡 vol. 8(6, 7区)』国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10 島根県教育委員会

松井整司・井上多津男 1971「三瓶火山の噴出物と層序」『地球科学』25、pp. 147-163

松尾充晶編 2003『古志本郷遺跡V 出雲国神門郡家関連遺跡の調査』斐川放水路建設予定地内発掘調査報告書 16 島根県教育委員会ほか

松本岩雄編 1999『上塩冶築山古墳の研究』島根古代文化センター調査研究報告書 4 島根県教育委員会ほか

三原一将・米田美江子 2002『下古志遺跡－考察編－』出雲市教育委員会

三原一将 2003『塩冶判官館跡』出雲市教育委員会

米田美江子・三原一将 2005『築山遺跡I』県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委員会

米田美江子・三原一将・高橋誠二 2007『築山遺跡II』県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委員会

渡辺正巳 1999「藤ヶ森南遺跡の花粉、プラント・オパール分析」『藤ヶ森南遺跡 出雲郵便局移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』出雲市教育委員会

渡辺正巳 2004「築山遺跡における自然科学分析」『寿昌寺遺跡・築山遺跡』出雲市教育委員会 pp. 157-166

渡辺正巳 2005「築山遺跡平成15年度1区発掘調査に係る自然科学分析」『築山遺跡I』出雲市教育委員会 pp. 117-122

### 第3章 島根大学出雲キャンパスの既往試掘調査成果

島根大学出雲キャンパス内では、平成16年度以降、開発工事に先立って継続的に試掘調査を実施してきている（表2、図1・2）。個々の試掘調査の基本層位・出土遺物は、表3～15・図5～13の通りである。なお、層名は、各トレンチごとに命名したものなので、トレンチが異なれば、同一層名であっても同一の層位ではない。

下記の通り、各試掘トレンチの基本層位は、盛土された近現代水田耕作土の第1層、その下位に自然堆積する神戸川やその分流によって運搬された砂層・シルト層（第2・3層）からなる。これまでの調査において第1層より下位の堆積層から遺物が出土しているのは、本報告書の第1次調査区を除くとキャンパス北東部の06-Aトレンチのみである。附属病院棟などが位置するキャンパス西側大半では、遺物はまったく出土していない。これは、当該地が神戸川の氾濫原に相当し、近代の水田が造営されるまでは考古学的痕跡を残すような人間活動が稀薄であったことを示している。

表2 島根大学出雲キャンパス既往試掘調査一覧

トレンチ名	表・図	主な内容	第1層下面の標高	調査原因	調査期間	文献
04	表3 図5	砂層・シルト層（第2層）	6.6	特高受変電棟建設	2004.5.17～20	—
06-A	表4 図6	シルト層（第2層） 上部の第2a層から須恵器（古墳終末）・土師器（古墳前期など）・弥生土器出土。	7.4	埋蔵文化財有無の確認	2006.3.15～17	—
06-B	表5 図6	細砂層・粗砂層（第2層）	7.0			
07-A	表6 図7	細砂層・シルト層（第2層）	6.5			
07-B	表7 図7	細砂層・シルト層（第2層）	6.7	医学部附属病院棟建設	2007.3.12～15 (補足追加調査) 2008.1.21～25	会下 2007・ 2008
08-1E	表8 図8	粘土層（第2層）、シルト層など（第3層）	5.9			
08-1C	表9 図8	粘土層（第2層）、シルト層・粗砂層など（第3層）	5.2	医学部附属病院立体駐車場建設	2008.12.8～26	会下 2009
08-1W	表10 図8	粘土層（第2層）、シルト層など（第3層）	5.4			
08-2	表11 図9	シルト層・粗砂層（第2層）	7.0	医学部会館保育所増設	2008.12.22～25	会下 2009
09	表12 図10	シルト層・粗砂層（第2層）	6.9	ヘリポート・格納庫建設	2009.7.13～16	会下 2010
12	表13 図11	細砂層・シルト層（第2層）	6.4	地域医療支援センター建設	2012.5.16～24	会下 2013
13	表14 図12	粘土層（第2層）、シルト層など（第3層）	6.7	地下式オイルタンク埋設	2013.9.5～12	会下 2015
14-A	表15 図13	シルト層（第2層）	6.0	防火水槽埋設	2014.3.12～17	会下 2015

※層名はトレンチごとに命名。

表3 04試掘トレンチ

層位	層相	標高(m)	遺物	堆積時期
現代盛土		6.9～10.1		昭和50年頃
第1層 (水田耕作土)	黄灰色粘土	6.6～6.9		近世？～近代
第2層	暗灰黄色細砂	～6.6	なし	不明

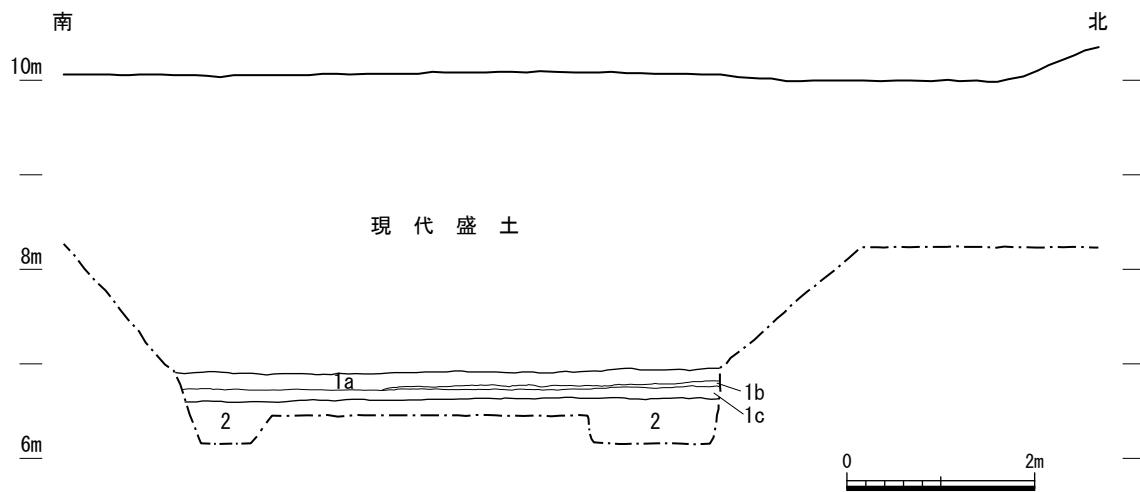


図5 04試掘トレーニチ西壁断面図(1/80)

表4 06-A試掘トレーニチ

層位	層相	標高(m)	遺物	堆積時期
現代盛土		7.7 ~ 9.1		昭和50年頃
第1層 (水田耕作土)	黒褐色粘土 暗オリーブ褐色粘土 黄灰色粘土	7.4 ~ 7.7	陶磁器・須恵器・土師器	近世?~近代
第2a層	灰色シルト	6.9 ~ 7.4	須恵器(古墳終末)・土師器(古墳前期など)・弥生土器	弥生~古墳
第2b層	灰色砂質シルト	~6.9	なし	不明

表5 06-B試掘トレーニチ

層位	層相	標高(m)	遺物	堆積時期
現代盛土		7.3 ~ 9.0		昭和50年頃
第1層 (水田耕作土)	黒褐色粘土 オリーブ黒色粘土 灰色粘土など	7.0 ~ 7.3	陶磁器・須恵器(奈良)・土師器(中世)	近世?~近代
第2a層	オリーブ黒色細砂	6.8 ~ 7.0	なし	不明
第2b層	褐色粗砂	~6.8	なし	不明

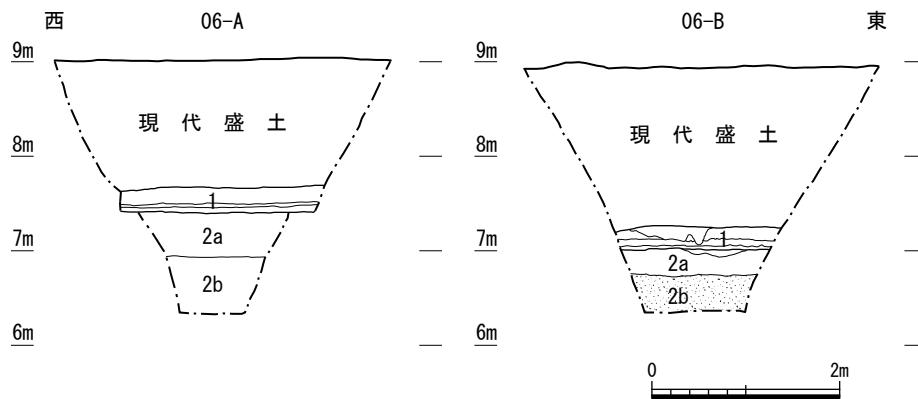


図6 06試掘トレーニチ西壁断面図(1/80)

表 6 07-A 試掘トレンチ

層位	層相	標高 (m)	遺物	堆積時期
現代盛土		6.9 ~ 10.1		昭和 50 年頃
第 1 層 (水田耕作土)	黒褐色粘土 暗オリーブ褐色粘土 オリーブ黑色粘土	6.5 ~ 7.0	土師器・陶磁器	近世? ~ 近代
第 2 a 層	オリーブ黑色シルト (細砂挟在)	6.4 ~ 6.5	なし	不明
第 2 b 層	灰オリーブ色シルト (植物生痕あり)	6.3 ~ 6.4	なし	不明
第 2 c 層	オリーブ黑色細砂 (湧水多い)	~ 6.4	なし	不明

表 7 07-B 試掘トレンチ基本層序

層位	層相	標高 (m)	遺物	堆積時期
現代盛土		6.9 ~ 10.3		昭和 50 年頃
第 1 層 (水田耕作土)	黒褐色粘土 暗オリーブ褐色粘土	6.7 ~ 7.0	陶磁器	近世? ~ 近代
第 2 a 層	灰オリーブ色細砂	6.6 ~ 6.7	なし	不明
第 2 b 層	オリーブ黑色シルト	6.4 ~ 6.6	なし	不明
第 2 c 層	灰オリーブ色細砂	6.3 ~ 6.4	なし	不明
第 2 d 層	暗灰黄色シルト (植物生痕あり)	6.1 ~ 6.3	なし	不明
第 2 e 層	オリーブ黑色細砂	5.9 ~ 6.1	なし	不明
第 2 f 層	オリーブ黑色シルト	~ 5.9	なし	不明

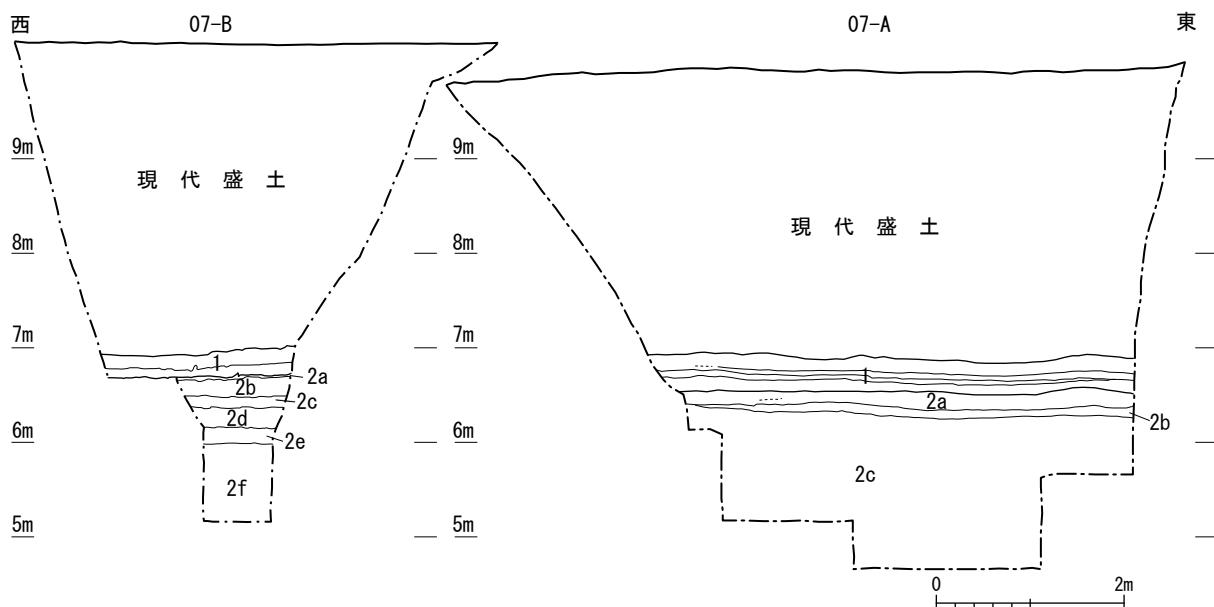


図 7 07 試掘トレンチ西壁断面図(1/80)

表 8 08-1E 試掘トレンチ

層名	層相	標高 (m)	遺物	堆積時期
現代盛土		6.7 ~ 8.2		昭和 50 年頃
第 1 層 (水田耕作土)	オリーブ黒色泥土 (大学造成前水田)	5.9 ~ 6.7	陶磁器	近世? ~ 近代
第 2 層	暗灰黄色粘土 (植物生痕あり) など	5.7 ~ 6.2	なし	不明
第 3 a 層	オリーブ黒色シルト 暗オリーブ灰色細砂など	3.5 ~ 5.9	なし	不明
第 3 b 層	黒褐色シルト	~ 3.7	なし	不明

表 9 08-1C 試掘トレンチ

層名	層相	標高 (m)	遺物	堆積時期
現代盛土		5.8 ~ 8.2		昭和 50 年頃
第 1 層 (水田耕作土)	オリーブ黒色泥土 (大学造成前水田)	5.2 ~ 5.9	陶磁器	近世? ~ 近代
第 2 層	黒褐色粘土	4.8 ~ 5.4	なし	不明
第 3 a 層	オリーブ黒色シルト オリーブ黒色細砂 黒褐色粘土	3.4 ~ 5.3	なし	不明
第 3 b 層	灰色粗砂	~ 3.5	自然礫 (三瓶山デイサイト : 約 3,600y. BP)	縄文後期

表 10 08-1W 試掘トレンチ

層名	層相	標高 (m)	遺物	堆積時期
現代盛土		6.0 ~ 8.2		昭和 50 年頃
第 1 層 (水田耕作土)	オリーブ黒色泥土	5.4 ~ 6.1	陶磁器	近世? ~ 近代
第 2 層	黒褐色粘土	5.0 ~ 5.4	なし	不明
第 3 層	オリーブ黒色細砂 オリーブ黒色シルト 灰色細砂	~ 5.1	標高 3.5 m 以下で自然礫 (三瓶山デイサイト : 約 3,600y. BP)	標高 3.5 m 以下は縄文後期

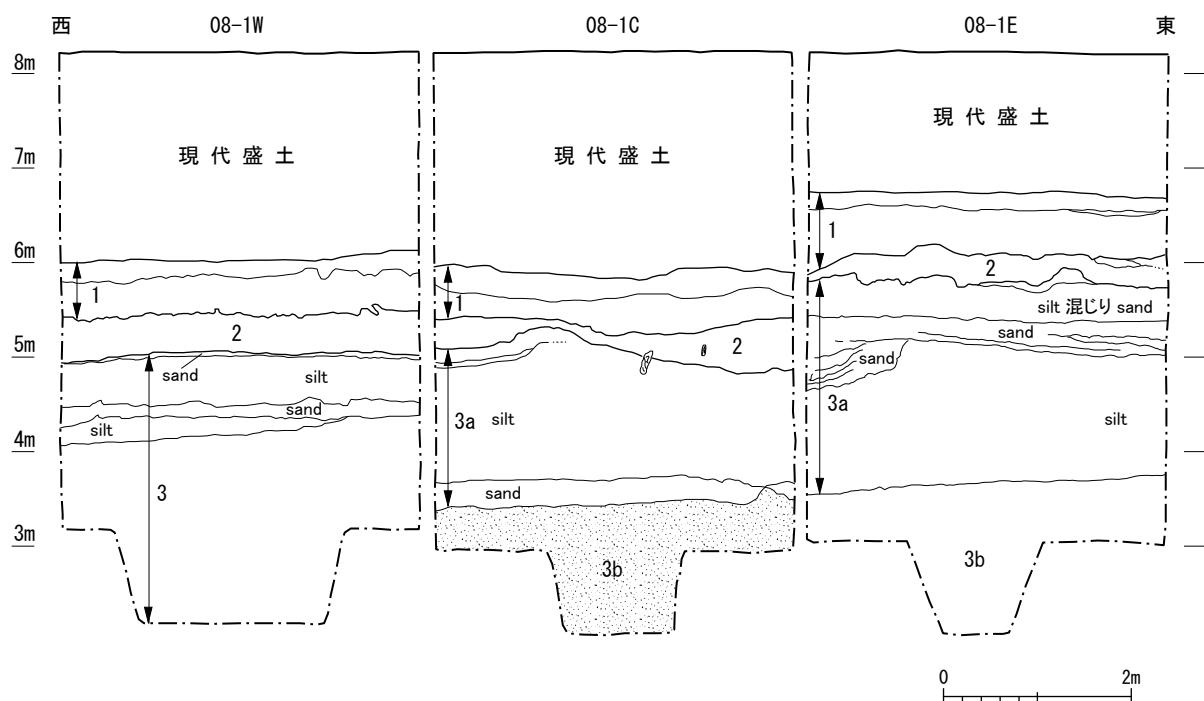


図 8 08 試掘トレンチ北壁断面図(1/80)

表 11 08-2 試掘トレンチ

層名	層相	標高 (m)	遺物	堆積時期
現代盛土		7.2 ~ 11.0		昭和 50 年頃
第 1 層 (水田耕作土)	オリーブ黒色泥土	7.0 ~ 7.3	陶磁器	近世? ~ 近代
第 2 a 層	オリーブ黒色シルト 灰オリーブ色シルト	6.7 ~ 7.1	なし	不明
第 2 b 層	オリーブ黒色シルト	6.4 ~ 6.7	なし	不明
第 2 c 層	灰色粗砂	~ 6.4	自然礫 (三瓶山デイサイト: 約 3,600y. BP)	縄文後期

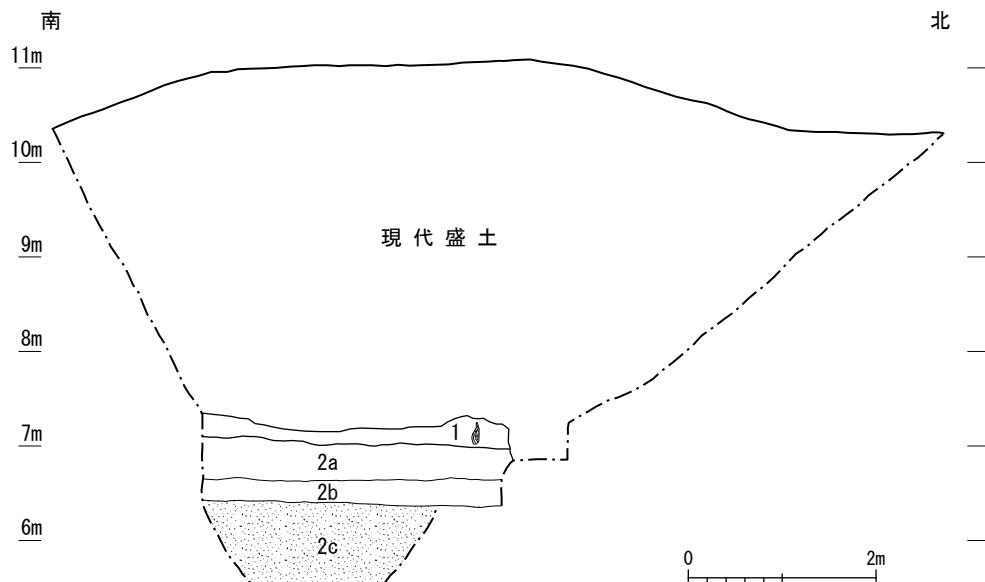


図 9 08-2 試掘トレンチ西壁断面図(1/80)

表 12 09 試掘トレンチ

層名	層相	標高 (m)	遺物	堆積時期
現代盛土		7.1 ~ 10.1		昭和 50 年頃
第 1 層 (水田耕作土)	黒褐色泥土	6.9 ~ 7.1	陶磁器・須恵器 (奈良)	近世? ~ 近代
第 2 a 層	灰色シルト	6.8 ~ 6.9	なし	不明
第 2 b 層	灰オリーブ色シルト	6.7 ~ 6.9	なし	不明
第 2 c 層	暗青灰色シルト	6.5 ~ 6.7	なし	不明
第 2 d 層	灰色粗砂	~ 6.5	自然礫 (三瓶山デイサイト: 約 3,600y. BP)	縄文後期

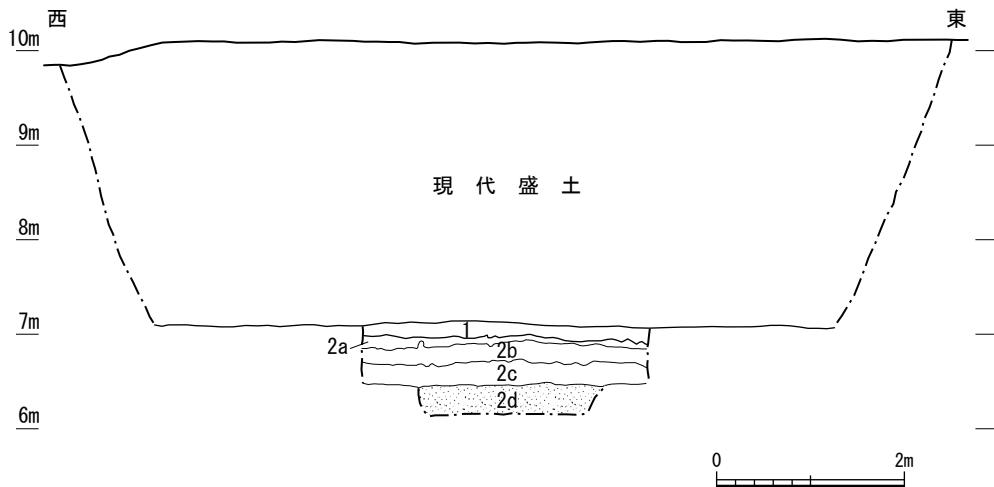


図 10 09 試掘トレンチ北壁断面図(1/80)

表 13 12 試掘トレンチ

層位	層相	標高 (m)	遺物	堆積時期
現代盛土		6.6 ~ 10.2		昭和 50 年頃
第 1 層 (水田耕作土)	オリーブ黒色粘土	6.4 ~ 6.8	陶磁器・瓦	近世? ~ 近代
第 2 層	オリーブ黒色細砂とシルトの互層	~ 6.6	なし	不明

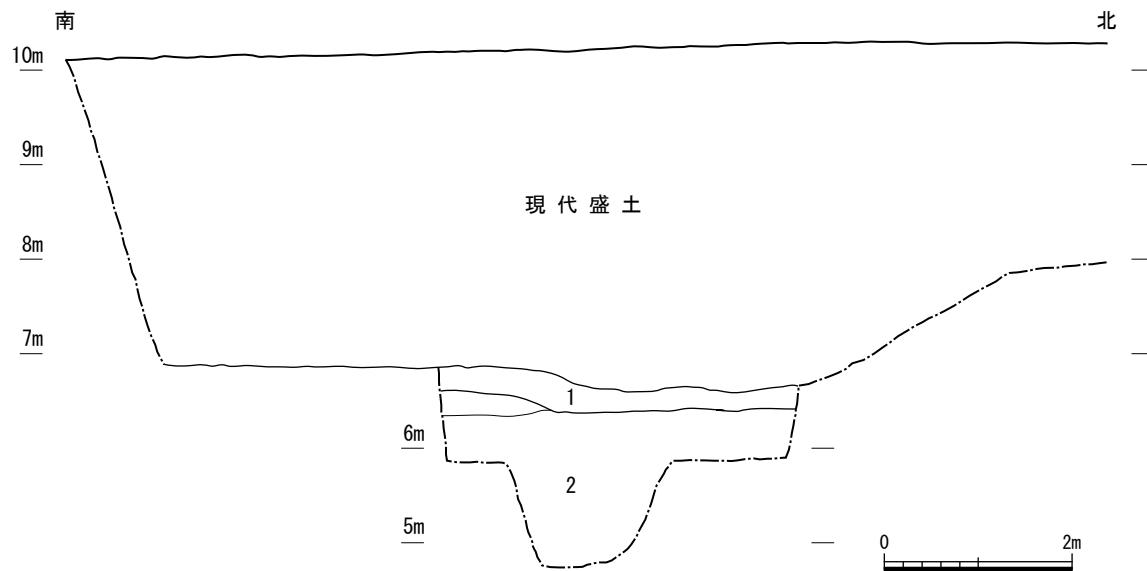


図 11 12 試掘トレンチ西壁断面図(1/80)

表 14 13 試掘トレンチ

層名	層相	標高 (m)	遺物	堆積時期
現代盛土		6.9 ~ 9.6		昭和 50 年頃
第 1 層 (水田耕作土)	オリーブ黒色泥土	6.7 ~ 6.9	陶磁器、須恵器、ビニール	近世? ~ 近代
第 2 層	オリーブ黒色粘土	6.6 ~ 6.7	なし	不明
第 3 a 層	灰色シルト	6.4 ~ 6.6	なし	不明
第 3 b 層	灰色細砂	6.1 ~ 6.5	なし	不明
第 3 c 層	オリーブ黒色シルト	~ 6.3	なし	不明

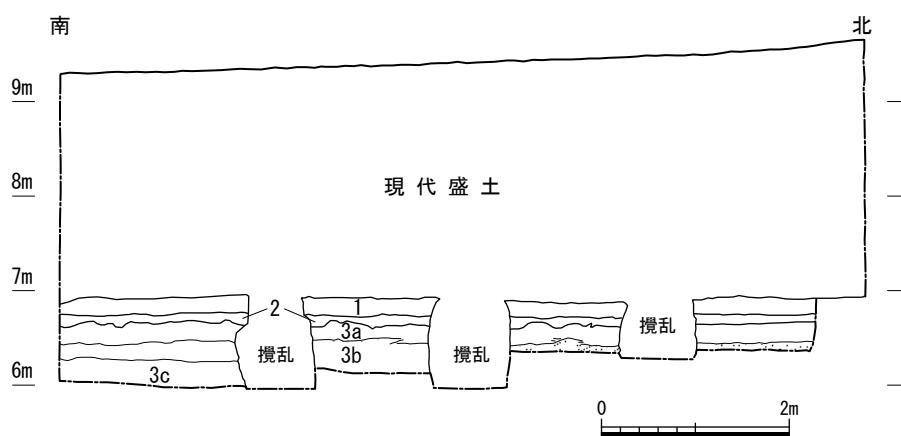


図 12 13 試掘トレンチ西壁断面図(1/80)

表 15 14-A 試掘トレンチ

層位	層相	標高 (m)	遺物	堆積時期
現代盛土		6.2 ~ 10.7		昭和 50 年頃
第 1 層 (水田耕作土)	オリーブ黒色泥土	6.0 ~ 6.2	陶磁器	近世? ~ 近代
第 2 層	オリーブ黒色シルト	5.7 ~ 6.0	なし	不明
第 3 層	黒褐色シルト	~ 5.8	なし	不明

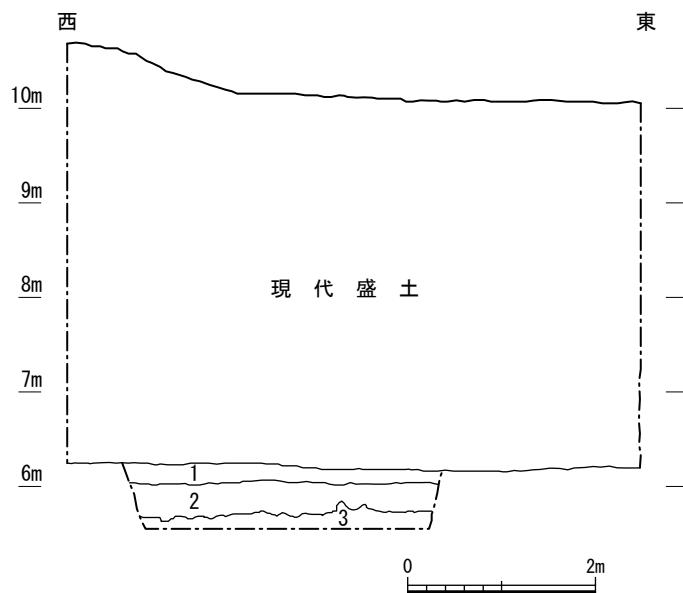


図 13 14-A 試掘トレンチ北壁断面図(1/80)

### 参考文献

- 会下和宏 2007 『島根大学ミュージアム年報 平成 18 年度』島根大学ミュージアム  
 会下和宏 2008 『島根大学ミュージアム年報 平成 19 年度』島根大学ミュージアム  
 会下和宏 2009 『島根大学ミュージアム年報 平成 20 年度』島根大学ミュージアム  
 会下和宏 2010 『島根大学ミュージアム年報 平成 21 年度』島根大学ミュージアム  
 会下和宏 2013 『島根大学ミュージアム年報 平成 23・24 年度』島根大学ミュージアム  
 会下和宏 2015 『島根大学学術情報機構ミュージアム年報 平成 25・26 年度』島根大学学術情報機構ミュージアム

ム

## 第4章 調査の方法と経過

### 1 調査の方法と構内座標の設定

調査は、現地表から約 2.4 ~ 2.5 m 下までの現代盛土を重機によって除去した後、下位の遺物包含層を人力によって掘り下げ、精査した。遺物包含層は、後述するように第1層から第3層までに大別され、層厚約 1.1 m ある。

発掘調査にあたり、出雲キャンパス内に構内座標を設定した。すなわち、世界測地系・平面直角座標系Ⅲの南北・東西軸座標値 ( $X = -72,100$  m,  $Y = 53,000$  m) を原点とし、同座標軸から南北軸を  $N - 6^\circ - W$  に振ったラインを構内座標南北軸とした（図1）。

そして、この構内座標軸を基準に 1 辺 4 m のグリッドを設定した。原点を通る東西ラインを AA、それより南へ 4 m ごとの東西ラインを AB・AC……AZ・BA・BB……、また原点を通る南北ラインを 000、それより東へ 4 m ごとの南北ラインを 001・002・003……、と呼称した（図1）。さらに、これらのラインによって形成される 4 m 四方のグリッド名は、その北西コーナーで交わる東西・南北ライン名を組み合わせて呼称した。例えば、東西の AA ラインと南北の 000 ラインが交わった点を北西コーナーとするグリッドは AA000 グリッド、東西の AB ラインと南北の 001 ラインが交わった点を北西コーナーとするグリッドは AB001 グリッドと呼称することになる。遺物の取り上げをはじめとした調査記録に際しては、このグリッド名を用いた。

なお、本調査区は、CM ~ CN・136 ~ 137 グリッドに位置する（図14）。

### 2 調査の経過

2014年3月10日、層厚約 2.4 ~ 2.6 m ある現代盛土の重機掘削を行った。

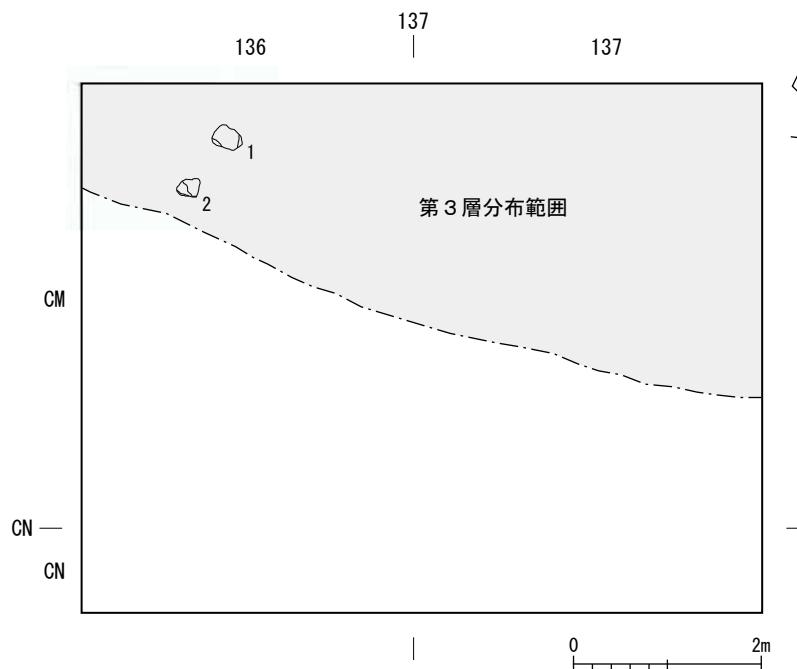


図14 調査区平面図 (1/80)

つづいて3月10～11日、人力によって第1層(近現代水田耕作土)の掘り下げ、精査を行った結果、層内から近現代陶磁器などが出土した。また、第1層の下位からは、調査区北半に第3層(砂層)、調査区南半に第2層(灰色シルト層など)が検出され、後者が前者を切っている状況が確認できた(図14)。

3月11～12日、第2層(オリーブ黒色シルト層など)を掘り下げた結果、若干量の須恵器片などが出土した。

3月11～17日、第3層(黒褐色細砂層など)を掘り下げた結果、弥生土器・土師器片などが出土した。この間、3月15日、東壁の断面写真撮影と図面作成を行っている。

3月17日、下位の第4層(オリーブ黒色シルト層)の掘り下げを行ったが、遺物の出土は認められなかった。

狭小な調査トレーンチ空間において、現地表下約3.6mまでの掘り下げを行い、排土を地上へ運び上げるという作業は、物理的に非常に厳しいものとなった。また、地下からの湧水が激しいことから、人力による掘り下げ作業も困難をきわめた。

3月17日、ミュージアム埋蔵文化財専門委員による現地での検討会を開催した。第4層が無遺物層であることと、これ以上の掘り下げが作業安全上、危険を伴うことからここで調査終了を判断した。

## 第5章 基本層序

現地表から、約 2.4 ~ 2.6 m は、昭和 50 ~ 51 年頃の島根医科大学キャンパス造営に伴う現代盛土である。現代盛土より下位の層序は、第 1 ~ 4 層に大別できる（表 16・図 15）。

### 堆積層の概要

#### 第1層

近代に盛土した旧水田耕作土で、しまったオリーブ黒色泥土・灰オリーブ泥土からなる。一部に小礫を含む。上面は、標高 +6.3 ~ 6.5 m、下位層との層理面は標高 +6.0 ~ 6.3 m。層厚 0.2 ~ 0.4 m 程である。下位の第 2 層とは不整合の関係にある。

#### 第2層

調査区南半のみで検出されており、調査区北半で検出された第 3 層を切っている。オリーブ黒色シルト・泥土を主体とし、黒褐色シルト・泥土が挟在する。上位第 1 層との層理面は標高 +6.0 ~ 6.3 m、下位第 4 層との層理面は標高 +5.3 ~ 5.4 m。層厚は最大で約 0.8 m。上位の第 1 層とは不整合の関係にある。須恵器片を包含する。

#### 第3層

調査区北半のみで検出されており（図 14）、調査区南半で検出された第 2 層に切られている。オリーブ黒色シルト・黒褐色シルトなどのシルト層と暗灰黄色細砂・黒褐色細砂などの細砂層が互層状に堆積する。上位第 1 層との層理面は標高 +6.1 m、下位第 4 層との層理面は標高 +5.4 m。層厚約 0.9 m。

本層は、調査区周辺にあった南東側から北西側へ向かう河川の氾濫に伴って堆積したものと考えられる。層中からは、縄文晚期突帯文土器および弥生中期後葉から終末期の弥生土器、さらに若干の古墳時代と中世の土師器の破片が出土している。量的には、特に弥生中期後葉から後期後葉の土器が主体をなす。出土レベルと土器の時期とは相関しない。磨滅度が少なく比較的大きい土器片は、近隣にあったものが本層の堆積時に二次的に包含されたと考えられる。本層の堆積時期は、最も新しい土器の時期を重視すると中世から近世初頭頃と想定される。

また、層中から人頭大の礫が 2 点出土しているが（図 14-1・2、図版 3-2）、重量からみて水流によって運搬されたのではなく、もともとごく近辺に人为的に運ばれていたものが、洪水に巻き込まれた結果、砂層内に包含されたものと推定される。

#### 第4層

オリーブ黒色シルト。上位の第 2 層および第 3 層との層理面は標高 +5.3 ~ 5.4 m。遺物なし。河川の氾濫に伴って、オーバーフローしたシルトが堆積したものと考えられる。

上記の基本層序の堆積環境を時代順にみていくと、以下のようない過程が復元できよう。調査区一帯は神戸川右岸の氾濫原に位置し、沖積層が形成されていた（第 4 層）。中世から近世初頭頃にいたつて、神戸川から分岐した自然流路の氾濫によって第 3 層（砂層）が堆積する。その際、近隣に存在していた弥生土器包含層の一部も浸食され、第 3 層に二次的に包含された。その後も別の氾濫によっ

て第3層が削られ、第2層（シルト層など）が堆積する。時代が飛躍し近代頃になると、水田造営のために盛土され（第1層）、昭和50年頃まで使用された後、島根医科大学キャンパスの敷地となり、大規模に盛土がなされ、現在に至る。

表 16 第1次調査区基本層位

層位	層相	標高 (m)	遺物	堆積時期
現代盛土		6.3～8.9		昭和50年頃
第1層 (大学造成前水田)	1. オリーブ黒色泥土 2. 灰オリーブ色泥土 3. オリーブ黒色泥土	6.0～6.5	陶磁器	近世？～近代
第2層	4. オリーブ黒色泥土 5. 黒褐色シルト 6. 黒褐色泥土 7. オリーブ黒色シルト	5.3～6.3	須恵器	近世初頭～
第3層	8. オリーブ黒色シルト 9. オリーブ黒色粘土 10. 暗灰黄色細砂 11. 黒褐色細砂 12. 黒褐色シルト 13. 暗灰黄色細砂	5.4～6.3	縄文土器 弥生土器 土師器	中世～近世初頭
第4層	オリーブ黒色シルト	～5.4	なし	不明

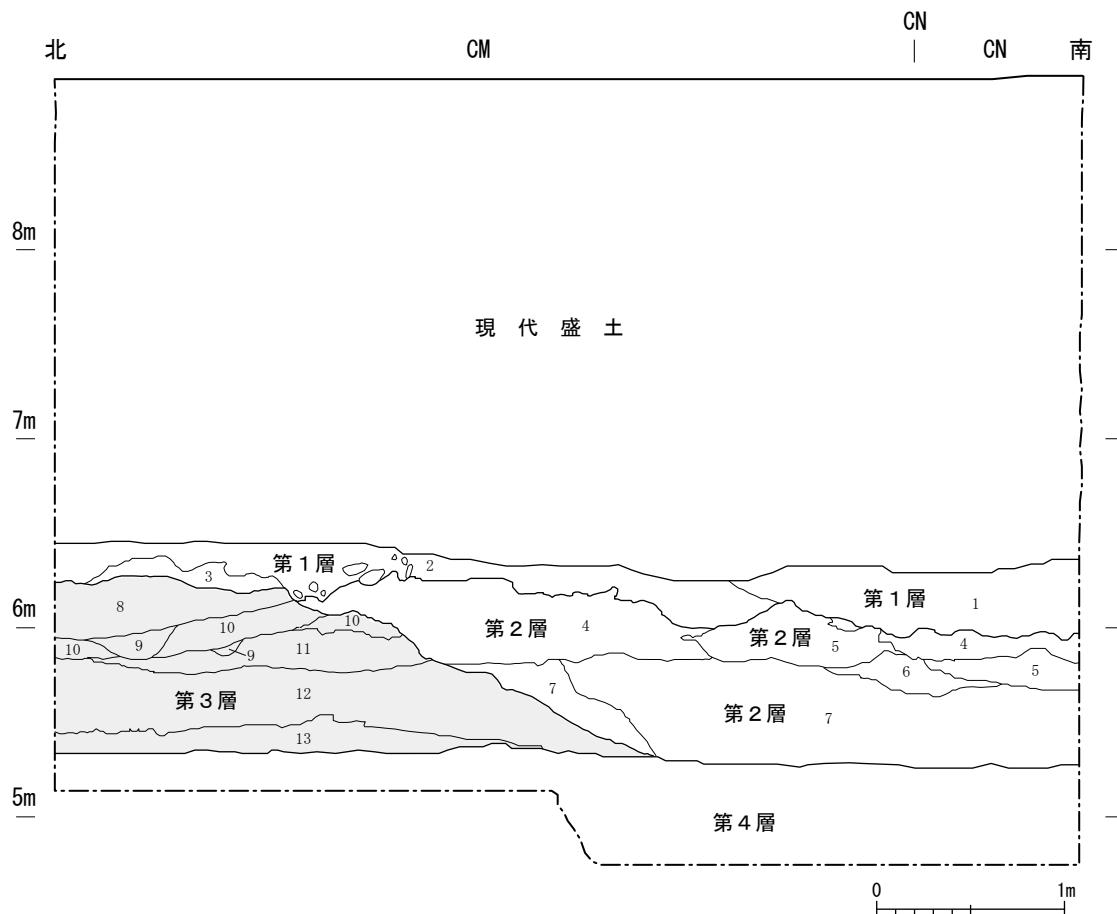


図 15 東壁断面図(1/40)

## 第6章 遺物

### 1 第3層の遺物

河川の氾濫に伴って堆積したシルト層・細砂層である第3層からは、縄文土器・弥生土器・人頭大の礫などが出土している。前述したように、磨滅度が少なく、比較的大きい土器片は、近隣にあったものが本層中の堆積時に包含されたと考えられる。

#### (1) 縄文土器 (図 16-1・2、図版4)

1～2は、縄文晚期後半の突帯文土器・口縁部である。1は、口縁端部と突帯に、7～10mm間隔でD字状の刻み目が付けられている。貼り付けた突帯は、幅約9mm・高さ約3mmを測る。2は、口縁端部・突帯とも尖り気味で、刻み目はない。貼り付けた突帯は、幅約8mm・高さ約5mmを測る。

#### (2) 弥生土器 (図 16-3～23・図 17-24～37・図 18-38～48、図版4～6)

3は、弥生中期後葉の広口壺・頸部である。幅約4mmの凹線文が施される。比較的、表面の磨滅が激しい。

4は、弥生中期後葉の高坏・口縁部である。口縁部外面に3条の凹線文が施される。口縁端部は平坦をなし、3条の細い凹線文が施されている。出雲・隱岐IV-1様式（松本1992）に位置づけられる。

5～13は、弥生中期後葉の内傾気味の口縁端部をもつ甕・壺である。このうち8と13は、復元口径からみて小形の広口壺になる可能性がある。5は、備後北部を中心に分布する塩町式の甕で、肩部に横方向の凹線文を施した後、斜方向の刺突文を刻む。口縁端部は主に上方に拡張され、3条程の凹線文が施される。内面は、口縁部と肩部の境が比較的強く屈曲し、明瞭な稜線をなしている。6・7は甕で、口縁端部が主に上方に拡張され、3条程の凹線文が施される。7の肩部は、比較的厚手である。9・10・11も甕で、口縁端部の拡張部に3条の凹線文が施されている。

14は小片だが、櫛描文が施された弥生中期後葉の長頸壺頸部と推定される。

15～20は、甕の胴部上半である。いずれも櫛状工具を連続刺突した斜方向の列点文が施されている。内面がナデ調整であることや色調から判断して、弥生中期後葉頃と考えられる。

21～23は弥生中期後葉の厚手で大形の広口壺である。21は、円筒状を呈する頸部から口縁部が外反し、上下に拡張し凹線文を有した口縁端部にいたる。22は、21よりも口縁部が大きく外反し、上下に拡張し凹線文を有した口縁端部にいたる。23は、大きく開く口縁部をもち、外傾気味の口縁端部には2条の凹線文が施される。

24～36は、弥生後期の甕・口縁部である。24は、拡張された口縁端部に2条の凹線文が施される。中期後葉にのぼる可能性もあるが、頸部内面にわずかにヘラケズリが認められることから弥生後期初頭頃と考えた。26～29は拡張された口縁端部の幅からみて、出雲・隱岐V-1様式、すなわち弥生後期初頭から前葉頃と考えられる。26は、比較的大型で厚手の口縁部を有し、凹線文が施され上方へ拡張された口縁端部はやや内傾する。全体に磨滅しているが、内面の頸部直下まで施されたヘラケズリ痕が認められる。27・28は、拡張された口縁端部が外傾し、内面の頸部直下ま

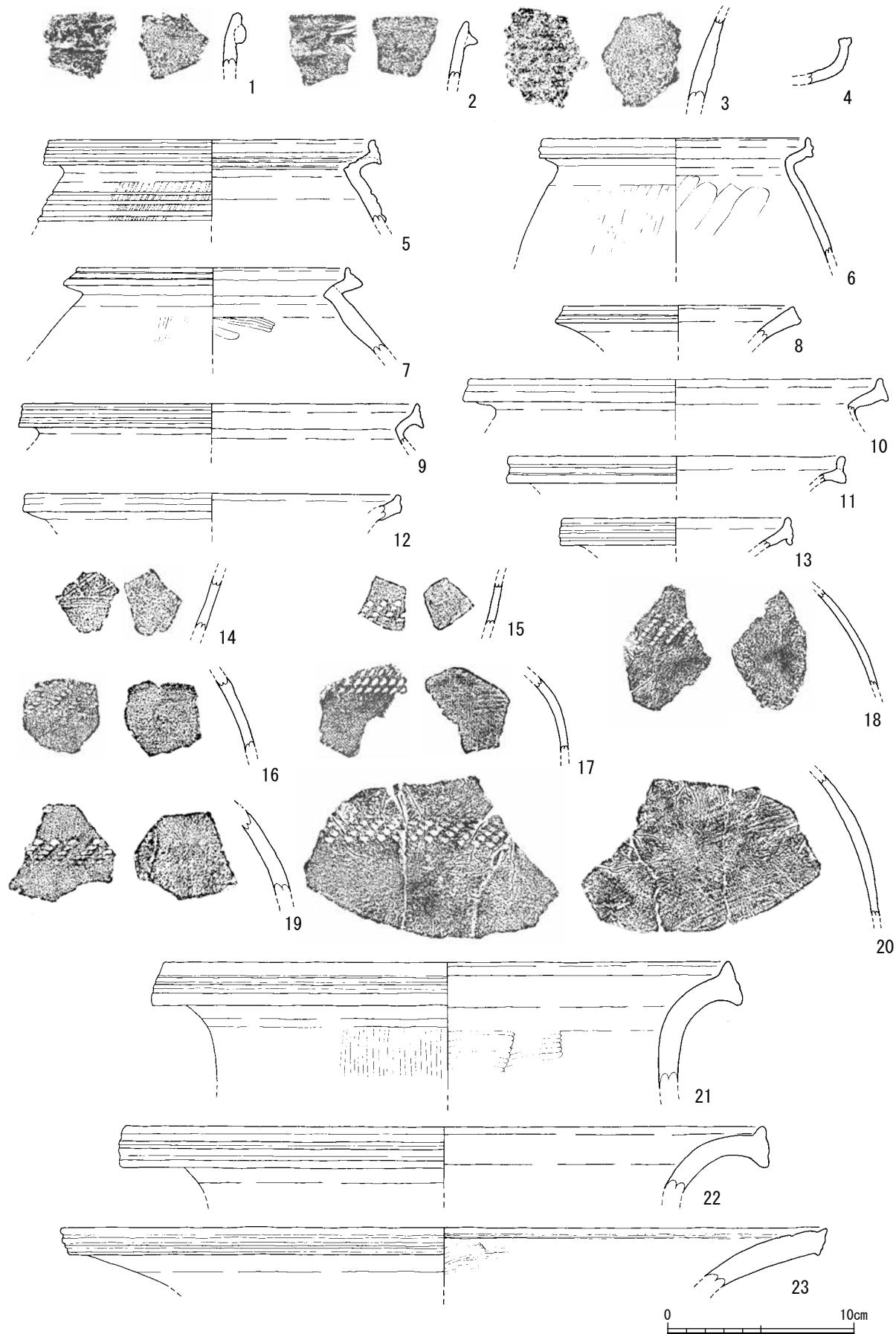


図 16 第3層出土遺物（その1、1/3）

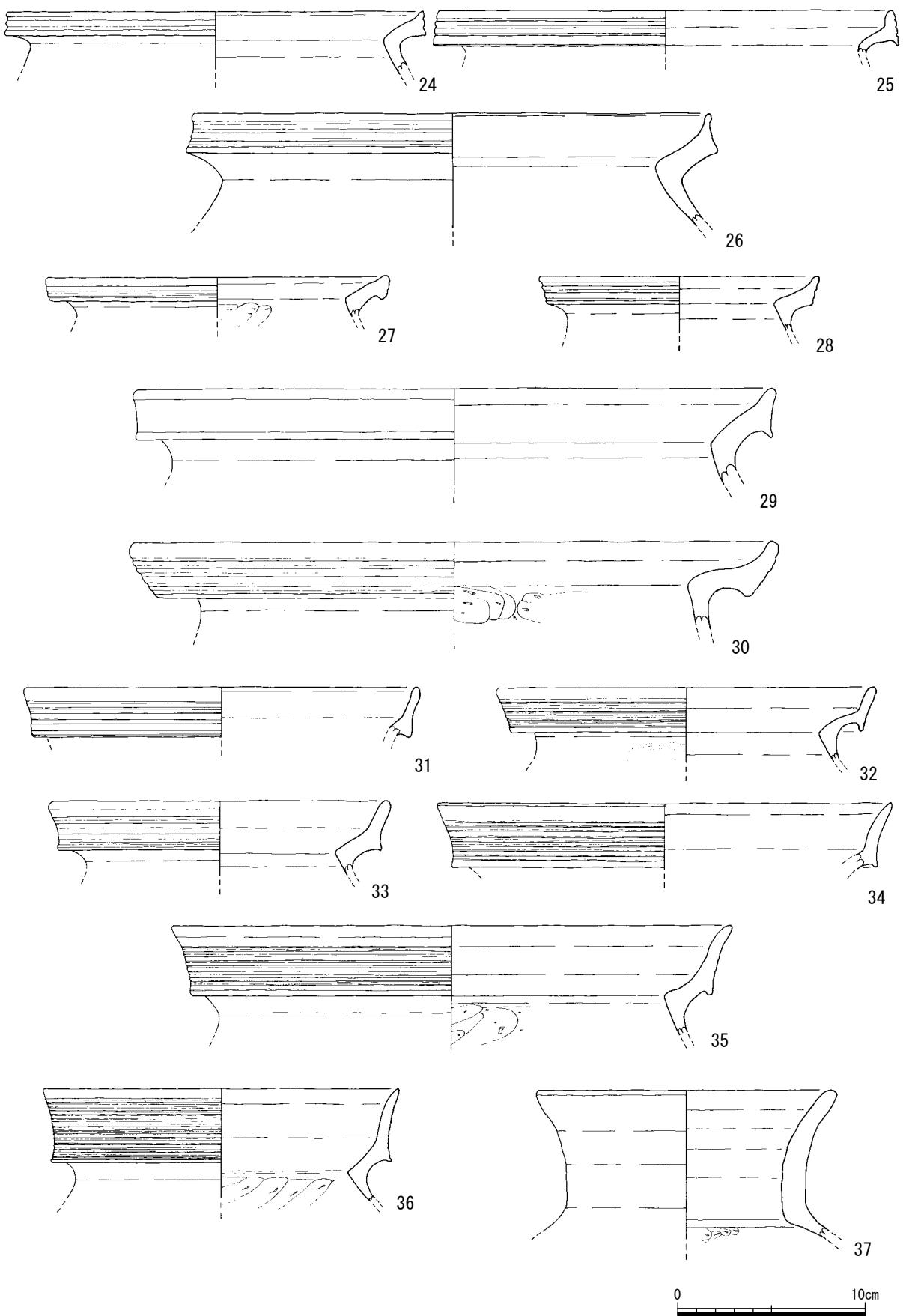


図 17 第3層出土遺物（その2、1/3）

でヘラケズリが施されている。29は、比較的大型で厚手の口縁部である。口縁部外面にはごく浅い凹線文が施されている。

30は、大型で厚手、外傾する口縁部。約3cmの幅を有する複合口縁の外面は、やや膨らみ気味で、ヘラ状工具による5条の沈線を有する。出雲・隱岐V-2様式、すなわち弥生後期中葉頃とみられる。

31～33は、複合口縁の外面が、櫛状工具によって平行線文が施される。複合口縁外面に施された平行線は、31が幅約2.5cmの中に7条、32が幅約2.4cmの中に8条、33が幅約2.6cmの中に12条ある。32は、口縁外面に赤色顔料の付着が認められる。31～33は、出雲・隱岐V-2様式、すなわち弥生後期中葉頃に位置付けられる。

34～36は、複合口縁がより上方に拡張、内湾する外面は櫛状工具による平行線文が施され、端部が尖り気味に丸く収まるものである。34は、複合口縁の幅約3.5cmを測り、上部はナデ消されているが、11条の平行線が認められる。35は、複合口縁の幅約4.0cmを測り、13条の平行線が認められる。36は、複合口縁の幅約4.0cmを測り、9条の櫛状工具で上と下2回にわたって17条の平行線を施している。V-3様式、すなわち弥生後期後葉頃に位置付けられる。

37は、単純口縁の壺である。内面は頸部直下までヘラケズリが施され、口縁部内外面はナデ調整となる。色調は他の土器には見られない橙色を呈する。

38～41は、壺か甕の胴部上半と考えられる。38は、ごく浅い平行する4条の直線文を軸にして、細くシャープな刺突文が羽状に施される。39は、磨滅しているが、横方向に2条の直線が認められ、その上下に斜方向の刺突文が連続して施される。40は、貝殻腹縁による波状文である。41は、櫛

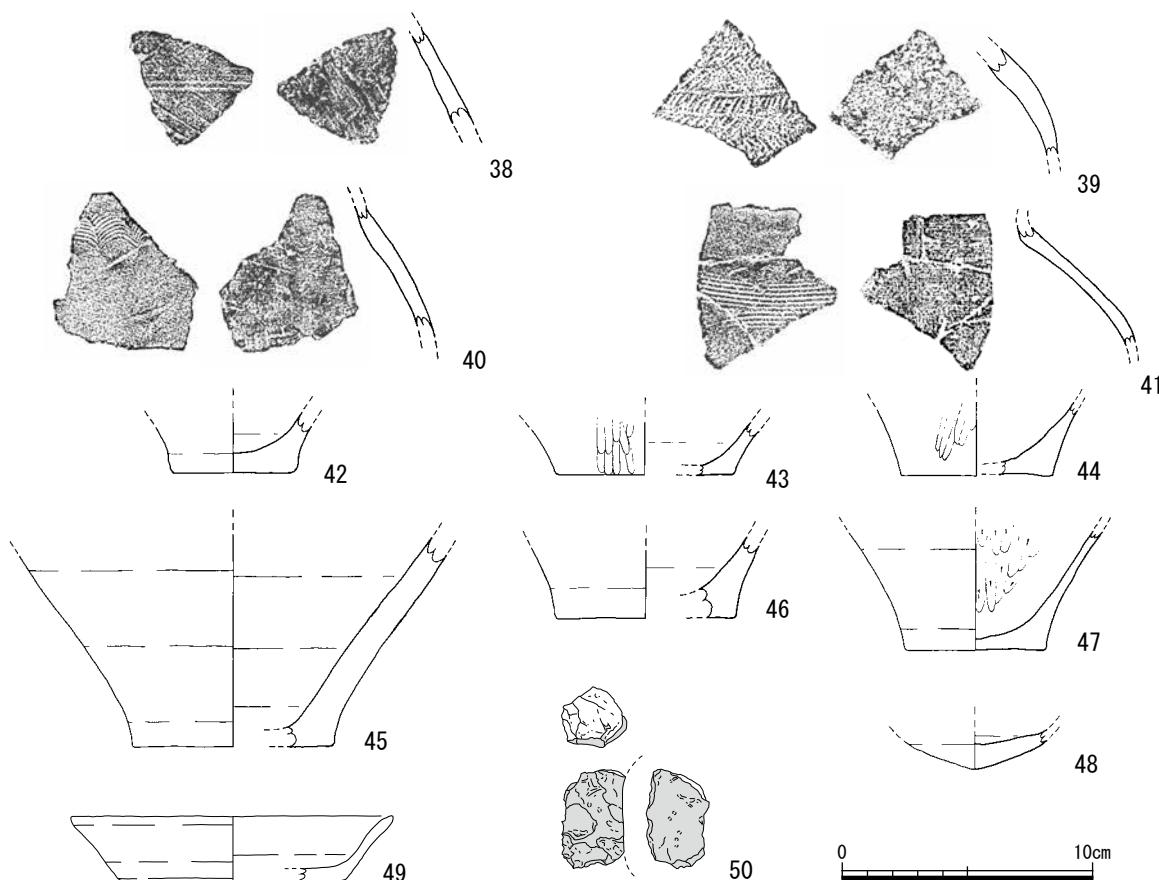


図18 第3層出土遺物（その3、1/3）

状工具による文様が施される。39～41は、内面がヘラケズリとなっており、弥生後期から終末期のものと考えられる。

42～47は平底の底部である。45は、厚手で大型品の底部になる。47は、内面に縦方向のヘラケズリ痕が認められる。48は、尖底の底部で、弥生終末期頃のものと考えられる。

### (3) 土師器 (図18-49、図版6)

49は、土師器の灯明皿である。回転糸切り痕が認められる平底底部から、内外面とも回転ナデ調整の口縁部が外反しながら立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸く収まる。内外面の一部には二次的な煤が付着する。おおむね16世紀中葉から17世紀初頭頃に位置付けられる(宍道2015)。

### (4) 羽口 (図18-50、図版6)

50は、鞴羽口の先端部破片である。図の右面は表面が平滑で、通風孔の壁部分に相当する。図の網掛け部分は、黒色ガラス質に溶解および炭化している。鞴羽口は、所属時期が明確ではないものの、近隣の築山遺跡2区・4A区でも出土している(米田ほか2007、三原ほか2009)。本資料も同様に所属時期が明確ではないが、49の土師器の時期を重視して、おおむね中世から近世初頭頃のものと考えておきたい。

### (5) 自然遺物 (図14-1・2、図版3-2)

自然遺物には、人頭大の自然礫がある。図14-1・図版3-2右上の自然礫はディサイト質火山礫凝灰岩で、最大約34cmを測り、三角錐状の形状である。図14-2・図版3-2左下の自然礫はディサイトで、最大約24cmを測り、同じく三角錐状である。石材は、いずれも付近に分布するものと考えられる<sup>(1)</sup>。

## 2 第2層の遺物 (図19-51～54、図版6-2)

51～54は、須恵器の大甕・体部片である。外面は格子状のタタキ、内面は同心円状の当て具痕を残す。

## 3 第1層の遺物 (図19-55、図版6-2)

第1層は、近世から近代までのある時期に盛土された水田耕作土で、島根医科大学の敷地として

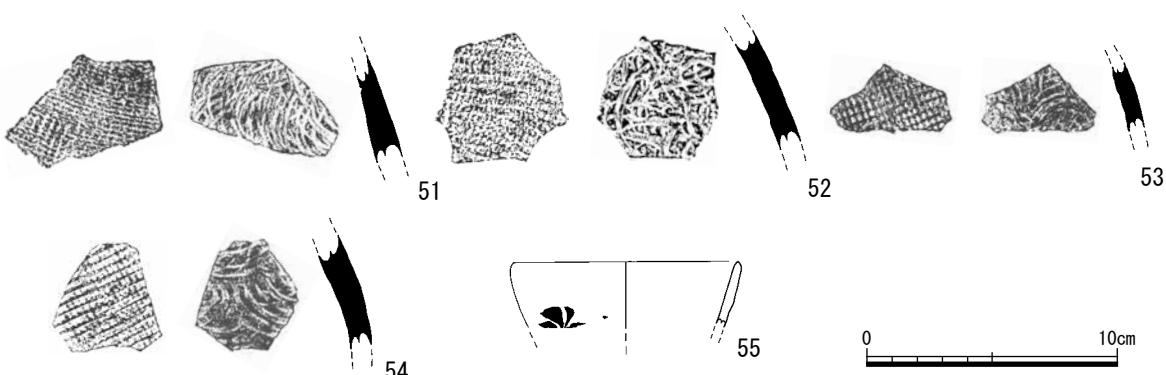


図19 第1・2層出土遺物 (1/3)

土地造成される昭和 50 年より前まで耕作されていた。55 の陶磁器など、近現代の遺物が含まれている。

### 註

(1) 石材鑑定については、入月俊明氏・大平寛人氏（島根大学総合理工学部）のご教示を得た。

### 参考文献

- 宍道年弘 2015 「鰐淵寺の陶磁器・土師器」『出雲鰐淵寺埋蔵文化財調査報告書』出雲市の文化財報告 28 出雲市教育委員会 pp. 249-255
- 松本岩雄 1992 「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年（山陽・山陰編）』木耳社 pp. 413-482
- 三原一将・米田美江子・高橋誠二・高橋周 2009 『築山遺跡III』県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委員会
- 米田美江子・三原一将・高橋誠二 2007 『築山遺跡II』県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委員会

表 17 遺物観察表

図	Grid	層位	器種	文様・形態・手法の特徴	色調	①胎焼 ②土成	備考
16-1	CM136	第3層（砂層）	縄文（口縁）	外：ナデ、貼付突 帶文 内：ナデ	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	①1.0 ~ 2.0mm 前 後の砂を多く含む ②普通	
16-2	CM136	第3層（砂層）	縄文（口縁）	外：ナデ、貼付突 帶文 内：ナデ	外：灰白色 内：灰白色	①1.0mm 前後の砂 を多く含む ②普通	
16-3	CM136	第3層（砂層）	弥生（壺・頸部）	外：凹線文 内：ナデ	外：にぶい橙色 内：浅黄橙色	①1.0mm 前後の砂 を多く含む ②普通	磨滅
16-4	CM137	第3層（砂層）	弥生（高杯・口縁）	外：ナデ、凹線文 内：ナデ	外：灰黄色 内：浅黄色	①1.0mm 前後の砂 を多く含む ②普通	口縁 1/10 残 存
16-5	CM137	第3層（砂層）	弥生（甕・口縁）	外：ナデ、凹線文、 輪描文 内：ナデ、凹線	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	①1.0mm 前後の砂 を多く含む ②普通	口縁 1/16 残 存
16-6	CM137	第3層（砂層）	弥生（甕・口縁）	外：ナデ、凹線文、 ハケメ 内：ナデ、ハケの ちナデ	外：褐灰色 内：にぶい黄橙色	①1.0mm 前後の砂 を多く含む ②普通	口縁 1/6 残 存
16-7	CM137	第3層（シルト層）	弥生（甕・口縁）	外：ナデ、凹線文、 ハケメ 内：ナデ、ハケメ	外：褐灰色 内：褐灰色	①1.0mm 前後の砂 を多く含む ②普通	口縁 1/8 残 存
16-8	CM137	第3層（砂層）	弥生（甕・口縁）	外：ナデ、凹線文 内：ナデ	外：浅黄色 内：浅黄色	①1.0mm 前後の砂 を多く含む ②普通	口縁 1/16 残 存
16-9	CM137	第3層（砂層）	弥生（甕・口縁）	外：ナデ、凹線文 内：ナデ	外：淡橙色 内：淡橙色	①1.0mm 前後の砂 を多く含む ②普通	
16-10	CM136	第3層（砂層）	弥生（甕・口縁）	外：ナデ 内：ナデ	外：灰黄色 内：灰黄色	①1.0mm 前後の砂 を多く含む ②普通	口縁 1/16 残 存
16-11	CM136	第3層（砂層）	弥生（甕・口縁）	外：ナデ、凹線文 内：ナデ	外：灰黃褐色 内：灰黃褐色	①1.0mm 前後の砂 を多く含む ②普通	口縁 1/12 残 存
16-12	CM137	第3層（砂層）	弥生（甕・口縁）	外：ナデ 内：ナデ	外：淡黄色 内：淡黄色	①1.0mm 前後の砂 を多く含む ②普通	口縁 1/16 残 存
16-13	CM136	第3層（砂層）	弥生（甕・口縁）	外：ナデ、凹線文 内：ナデ	外：淡黄橙色 内：淡黄橙色	①1.0mm 前後の砂 を多く含む ②普通	口縁 1/16 残 存

16-14	CM137	第3層(砂層)	弥生(甕・胴部)	外:櫛描文 内:ナデ	外:灰白色 内:灰白色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	
16-15	CM137	第3層(砂層)	弥生(甕・胴部)	外:刺突文 内:ナデ	外:灰白色 内:灰白色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	
16-16	CM136	第3層(砂層)	弥生(甕・胴部)	外:ナデ、刺突文 内:ナデ	外:にぶい橙色 内:にぶい橙色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	
16-17	CM137	第3層(シルト層)	弥生(甕・胴部)	外:ナデ、刺突文 内:ハケのちナデ	外:淡黄色 内:淡黄色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	
16-18	CM136	第3層(砂層)	弥生(甕・胴部)	外:ナデ、刺突文、 ハケメ 内:ナデ	外:灰白色 内:灰白色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	
16-19	CM136	第3層(砂層)	弥生(甕・胴部)	外:ナデ、刺突文 内:ナデ、ヘラケズリ	外:灰白色 内:灰白色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	
16-20	CM137	第3層(砂層)	弥生(甕・胴部)	外:ナデ、連続刺突文、 ハケメ 内:ハケのちナデ	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	外面煤付着
16-21	CM137	第3層(砂層)	弥生(広口壺・口縁)	外:ナデ、凹線文、 ハケメ 内:ナデ、ハケメ	外:浅黄橙色 内:浅黄橙色	①1.0～2.0mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/12 残存
16-22	CM137	第3層(砂層)	弥生(広口壺・口縁)	外:ナデ、凹線文 内:ナデ	外:浅黄橙色 内:浅黄橙色	①1.0～2.0mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/16 残存
16-23	CM137	第3層(シルト層)	弥生(広口壺・口縁)	外:ナデ、凹線文 内:ナデ、凹線文、 ハケメ	外:淡黄色 内:淡黄色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/16 残存
16-24	CM136	第3層(砂層)	弥生(甕・口縁)	外:ナデ、凹線文 内:ナデ、ヘラケズリ	外:浅黄橙色 内:浅黄橙色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/12 残存
17-25	CM136	第3層(砂層)	弥生(甕・口縁)	外:ナデ、凹線文 内:ナデ	外:淡黄色 内:淡黄色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	口径24cm 口縁1/8 残存
17-26	CM136	第3層(砂層)	弥生(甕・口縁)	外:ナデ、凹線文 内:ナデ	外:灰黄色 内:灰黄色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/12 残存付着磨滅
17-27	CM137	第3層(砂層)	弥生(甕・口縁)	外:ナデ、凹線文 内:ナデ、ヘラケズリ	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/16 残存
17-28	CM137	第3層(砂層)	弥生(甕・口縁)	外:ナデ、凹線文 内:ナデ	外:灰黄褐色 内:灰黄褐色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/16 残存
17-29	CM136	第3層(砂層)	弥生(甕・口縁)	外:ナデ、櫛描文 をナデ消し 内:ナデ	外:淡黄色 内:淡黄色	①1.0～1.5mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/16 残存
17-30	CM136	第3層(砂層)	弥生(甕・口縁)	外:ナデ、凹線文 内:ナデ、ヘラケズリ	外:明黄褐色 内:にぶい黄橙色	①1.0～1.5mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/12 残存
17-31	CM137	第3層(砂層)	弥生(甕・口縁)	外:ナデ、凹線文 内:ナデ	外:淡黄色 内:淡黄色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/16 残存
17-32	CM137	第3層(シルト層)	弥生(甕・口縁)	外:ナデ、凹線文、 櫛描文 内:ナデ	外:浅黄橙色 内:浅黄橙色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/12 残存
17-33	CM136	第3層(砂層)	弥生(甕・口縁)	外:ナデ、凹線文 内:ナデ	外:浅黄色 内:灰白色	①1.0～1.5mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/12 残存
17-34	CM136	第3層(砂層)	弥生(甕・口縁)	外:ナデ、凹線文 内:ナデ	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/16 残存
17-35	CM137	第3層(砂層)	弥生(甕・口縁)	外:ナデ、貝殻腹 縁による条痕 内:ナデ、ヘラケズリ	外:灰白色 内:灰白色	①1.0～1.5mm前後の砂を多く含む ②普通	
17-36	CM137	第3層(砂層)	弥生(甕・口縁)	外:ナデ、貝殻腹 縁による条痕 内:ナデ、ヘラケズリ	外:灰白色 内:灰白色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/8 残存
17-37	CM136	第3層(砂層)	弥生(直口壺・口縁)	外:ナデ 内:ナデ、ヘラケズリ	外:橙色 内:橙色	①1.0～1.5mm前後の砂を多く含む ②普通	口縁1/8 残存

18-38	CM137	第3層（シルト層）	弥生（甕・胴部）	外：櫛描羽状文、4条のヘラ描き直線文 内：ナデ	外：灰白色 内：灰白色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	
18-39	CM137	第3層（砂層）	弥生（甕・胴部）	外：ナデ、櫛描文 内：ヘラケズリ	外：淡黄色 内：淡黄色	①1.0～2.0mm前後の砂を多く含む ②普通	磨滅
18-40	CM136	第3層（砂層）	弥生（甕・胴部）	外：ナデ、波状文 内：ヘラケズリ	外：淡黄色 内：淡黄色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	
18-41	CM137	第3層（砂層）	弥生（甕・胴部）	外：櫛描文 内：ナデ、ヘラヘラケズリ	外：浅黄橙色 内：灰白色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	
18-42	CM137	第3層（シルト層）	弥生（底部）	外：ナデ 内：ナデ	外：明黄褐色 内：黒褐色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	底部1/3残存
18-43	CM137	第3層（砂層）	弥生（底部）	外：ヘラミガキ 内：ナデ	外：灰黄色 内：灰黄色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	底部1/8残存
18-44	CM137	第3層（砂層）	弥生（底部）	外：ナデのちヘラミガキ 内：ナデ、指頭圧痕	外：灰黄褐色 内：褐灰色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	底部1/8残存
18-45	CM136	第3層（砂層）	弥生（底部）	外：ナデ 内：ナデ	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	底部1/6残存
18-46	CM137	第3層（砂層）	弥生（底部）	外：ナデ 内：ナデ	外：暗灰黄色 内：淡黄色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	底部1/6残存
18-47	CM137	第3層（砂層）	弥生（底部）	外：ヘラケズリのちナデ 内：ヘラケズリのちナデ	外：暗灰黄色 内：灰黄色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	底径5.5cm
18-48	CM136	第3層（砂層）	弥生（底部）	外：ナデ 内：ナデ	外：灰白色 内：灰白色	①1.0mm前後の砂を多く含む ②普通	底部ほぼ残存
18-49	CM137	第3層（シルト層）	土師器（皿）	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底部：回転糸切り	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	①0.02mm以下のウンモ含む ②普通	底部1/4残存 内外面に二次的な煤
18-50	CM137	第3層（シルト層）	羽口		明赤褐色	①1.0mm前後の砂を少し含む ②普通	二次的に溶解・炭化
19-51	CM137	第2層	須恵器（甕）	外：格子状タタキ 内：同心円状当て具痕	外：灰色 内：灰色	①0.5mm前後の砂を少し含む ②普通	
19-52	CM137	第2層	須恵器（甕）	外：格子状タタキ 内：同心円状当て具痕	外：灰色 内：灰色	①1.0mm前後の砂を少し含む ②普通	
19-53	CN137	第2層	須恵器（甕）	外：格子状タタキ 内：同心円状当て具痕	外：灰色 内：灰色	①0.5mm前後の砂を少し含む ②普通	
19-54	CM137	第2層	須恵器（甕）	外：格子状タタキ 内：同心円状当て具痕	外：灰色 内：灰色	①精良 ②良好	
19-55	CM137	第1層	陶磁器（椀）	外：施釉 内：施釉	外：明緑灰色に青灰色の文様 内：明緑灰色	①精良 ②良好	

## 第7章　まとめ

島根大学出雲キャンパス内では、構内における埋蔵文化財の有無を確認するために、平成16年度から試掘調査を実施してきた。その結果、キャンパス北東部の06-A試掘トレンチにおいて弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層を検出していたが、キャンパス西半部では遺物の出土は皆無であった。キャンパス西半部は、神戸川やその分流の氾濫原に相当し、人間活動に適した環境ではなかつたためであろう。

これに対して、キャンパス北東部は、東側の段丘や丘陵にある、すでに知られた築山遺跡（図4-47）・寿昌寺遺跡（図4-49）にも近いことから、人間活動の舞台として比較的適した場所であったことが推定できる。

今回報告した第1次調査区（CM～CN・136～137グリッド）は、これまで未調査だったキャンパス南東部に位置しているが、上記したキャンパス北東部とも比較的近距離であるため、何らかの埋蔵文化財の存在が期待された。調査の結果、弥生中期後葉から後期後葉にかけての遺物を主体的に包含した砂礫層（第3層）を確認することができた。ただし、第3層は、古墳時代や中世の土師器がわずかに含まれていることから、その堆積時期は、弥生時代ではなく、中世頃であると解釈しておきたい。いずれにしても、弥生土器片に摩滅がみられないものが多くあることから、調査区付近に弥生中期後葉から後期後葉を主体とした時期の集落が存在していたものと考えられる。

本遺跡周辺の弥生集落の動向をみると表18の通りである。神戸川右岸の南部丘陵寄りでは、三瓶火山第VI期活動時（3,600～3,800yBP）の堆積物をベースとした安定した陸域を舞台に、三田谷I遺跡（図4-52）・築山遺跡（図4-47）など、弥生前期から集落が散在する。さらに、弥生中期には北部の神戸川右岸沖積地においても天神遺跡（図4-30）などで集落が成立する。一方、神戸川左岸では、弥生中期中葉以降に古志本郷遺跡（図4-69）・下古志遺跡（図4-67）・田畠遺跡（図4-68）などで本格的な集落形成が始まっている。

これらをごく概括的にみれば、弥生中期後葉前後を画期にして、集落が断絶したり形成されたり

表18 寿昌寺西遺跡周辺の弥生集落の変遷（景山2016をもとに一部改変して作成）

地域	図4	遺跡名	所在地	前期			中期			後期			終末期	古墳前期
				前	中	後	前	中	後	前	中	後		
神戸川左岸	69	古志本郷遺跡	出雲市古志町											
	67	下古志遺跡	出雲市下古志町											
	68	田畠遺跡	出雲市下古志町											
	65	知井宮多聞院遺跡	出雲市知井宮町											
	63	浅柄遺跡	出雲市知井宮町											
神戸川右岸	52	三田谷I遺跡	出雲市上塩治町											
	53	三田谷III遺跡	出雲市上塩治町											
	47	築山遺跡	出雲市上塩治町											
	33付近	藤ヶ森南遺跡	出雲市今市町											
	32	善行寺遺跡	出雲市塩治町											
	30	天神遺跡	出雲市天神町											
	29	海上遺跡	出雲市塩治町											

■ 遺構・遺物とも集中 ■ 遺構・遺物がやや集中。または遺物のみ集中（遺構なし）

■ 遺物が少なく遺構が不明瞭。または遺物のみ少量出土 □ 遺構なし。遺物ごく少量。またはなし

する傾向がうかがえる。なお、こうした状況は、山陰地域全体のおおまかな様相でもある（会下2016）。本遺跡における弥生中期後葉から後期後葉を主体とした遺物の出土量もこうした周辺集落の動向と同調したものといえよう。

また、弥生中期後葉の土器のなかには、広島県北部の三次盆地を中心に分布する塩町式土器の甕がみられる。塩町式土器の甕は、山陰側では、主に出雲地域の松江市から石見中部地域の浜田市にかけて、斐伊川流域・神戸川流域・江の川流域・日本海沿岸部などに分布しており（石田2013）、本遺跡周辺では、中野西遺跡（図4-26付近、坂本2002）・古志本郷遺跡（松山1998、平石1999、守岡ほか2003）・下古志遺跡（三原・米田2001）などから出土している。以上の分布状況からみると、本遺跡における塩町式土器の出土は、中国山地山間部と出雲平野を結ぶ神戸川の川筋ルートを通じた文物交流を反映したものと考えられる<sup>(1)</sup>。

今回は狭小な範囲の発掘調査であったため、得られた遺跡の情報はごく限定されたものに留まった。しかし、これまでほとんど不明であった本遺跡の時期的な位置付けができた意義は大きい。今後の周辺発掘調査によって、さらに遺跡の具体的な内容や範囲について明らかにし、島根大学出雲キャンパス一帯における地域史の叙述に寄与できるよう努めていきたい。

## 註

(1) 弥生中期後葉は、山陰地域で鉄器の流通が活発化する時期である。中国山地山間部の神戸川流域でも飯南町森VI遺跡（山崎ほか2009）で板状鉄斧などの鉄器が出土している。

## 参考文献

- 石田爲成 2013 「山陰地方における塩町甕の分布について」『立命館大学考古学論集』6 pp. 123-130  
会下和宏 2016 「山陰における弥生墳丘墓・集落の動向／弥生墳墓の副葬品配置」『第2回伊都国フォーラム 倭國誕生－伊都国から邪馬台国へ－』糸島市教育委員会 pp. 30-33  
景山このみ 2016 「出雲地域における弥生集落遺跡と杉沢集落」『杉沢遺跡・杉沢II遺跡・杉沢横穴墓群』出雲市教育委員会 pp. 269-280  
坂本豊治 2002 『中野西遺跡 出雲市北部第二土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』出雲市教育委員会  
平石 充 1999 『古志本郷遺跡I』島根県教育委員会  
松山智弘 1998 『市道本郷新宮線道路改良工事に伴う古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書』出雲市教育委員会  
三原一将・米田美江子 2001 『下古志遺跡 一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』出雲市教育委員会  
守岡利栄ほか 2003 『古志本郷遺跡VI』島根県教育委員会  
山崎順子・藁科哲男 2009 『森II遺跡・森III遺跡・森IV遺跡・森VI遺跡』飯南町教育委員会





1 調査風景（南西から）



2 調査区全景（西から）

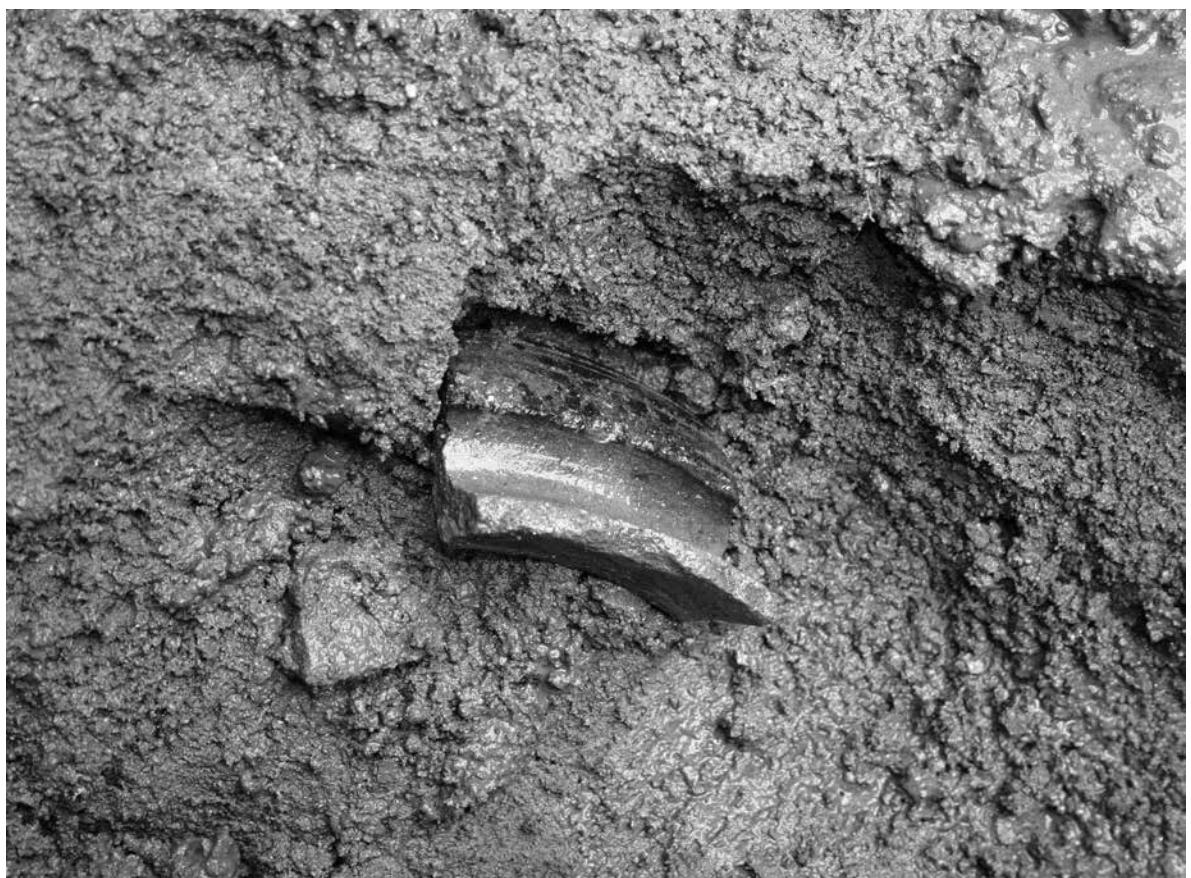
図版二 遺跡



1 東壁断面（南東から）



2 弥生土器出土状態（第3層）

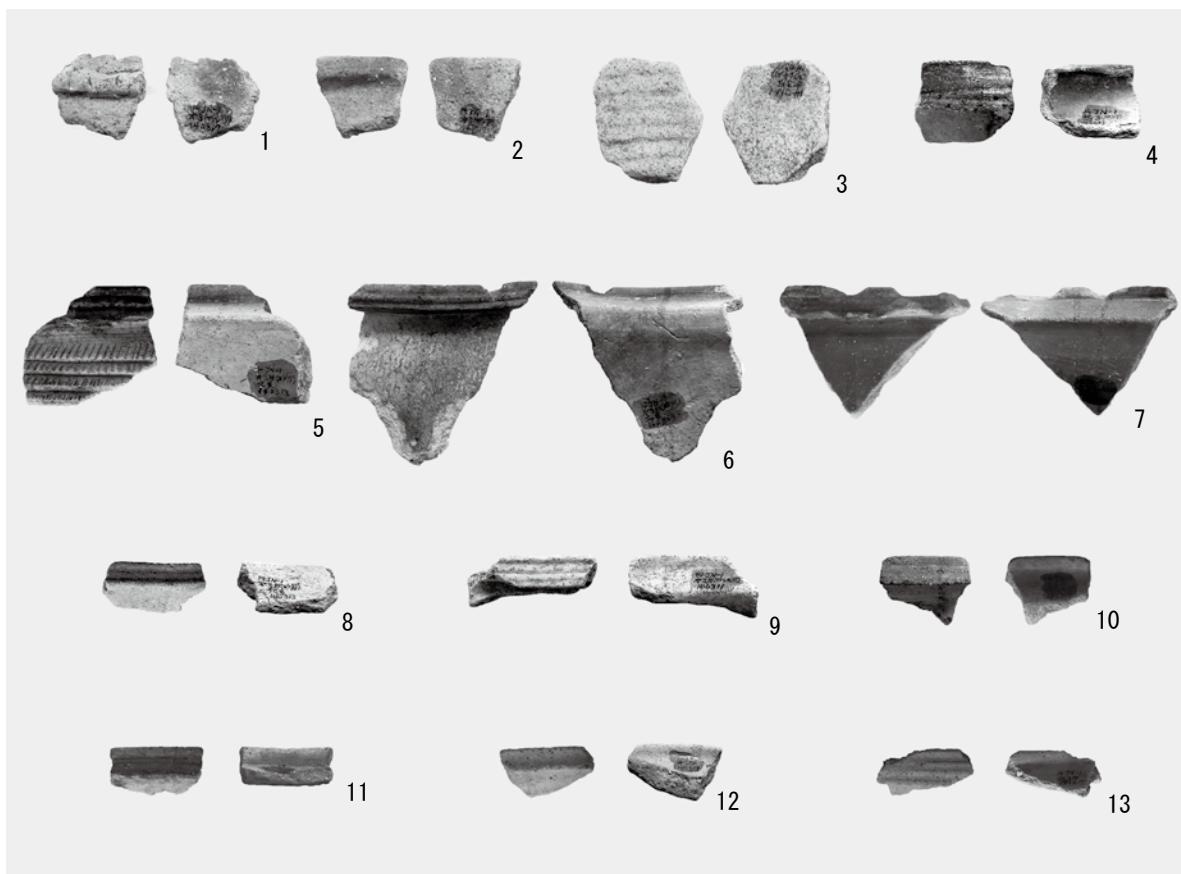


1 弥生土器出土状態（第3層）

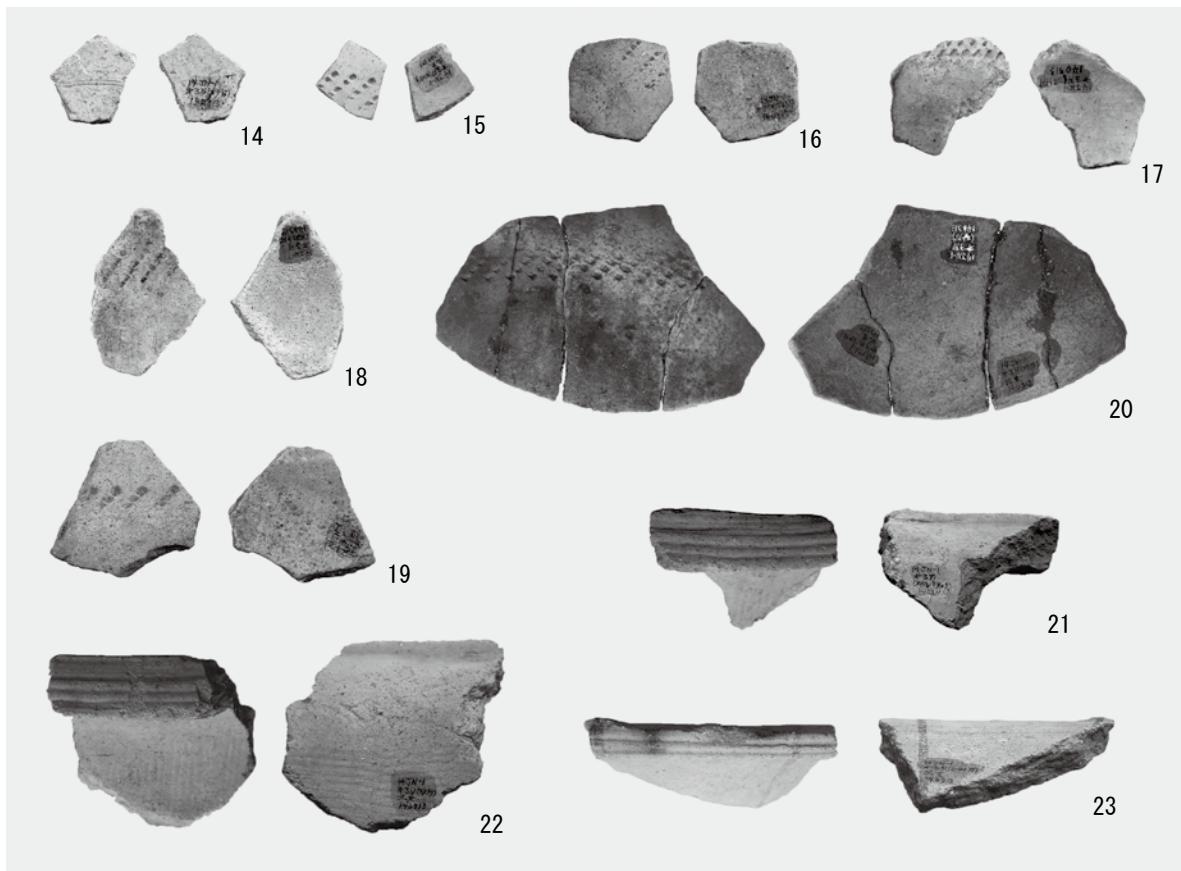


2 自然礫出土状態（第3層、南から）

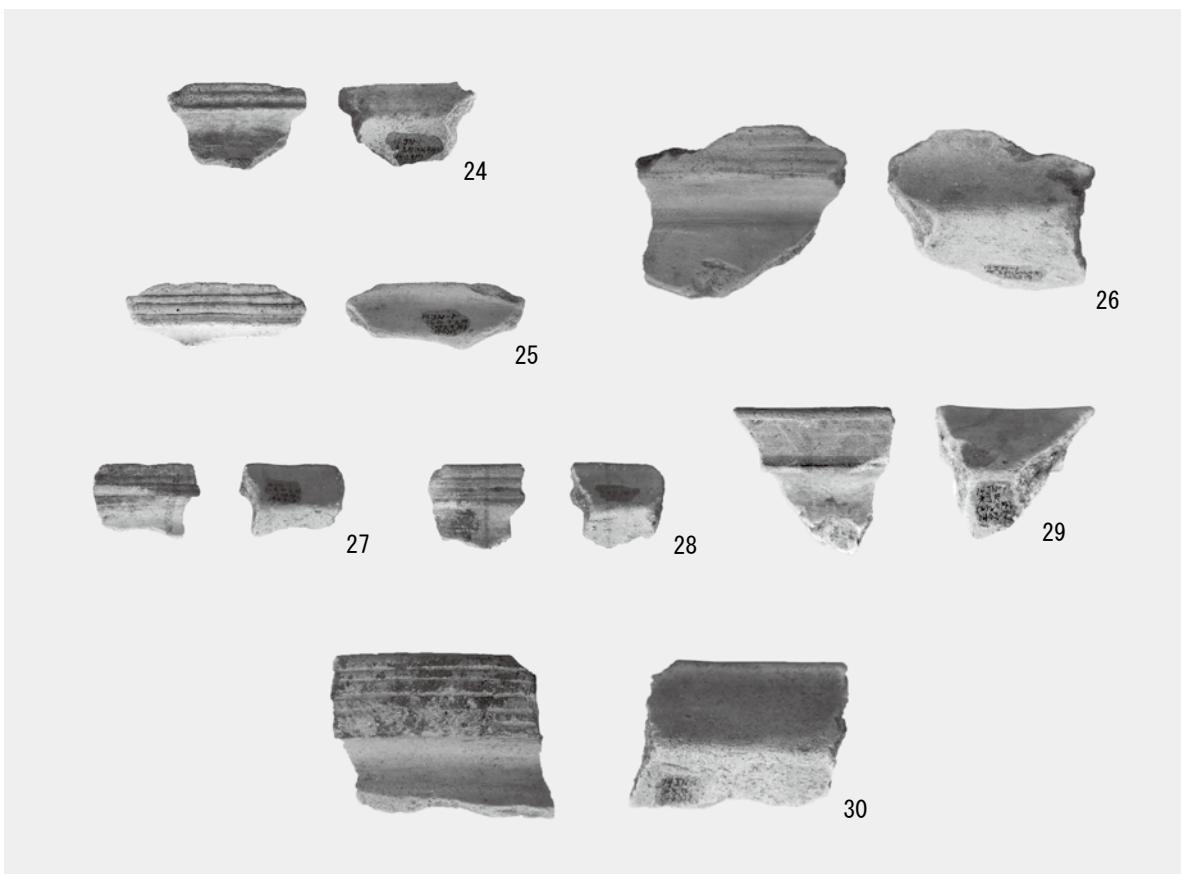
圖版  
四  
遺物



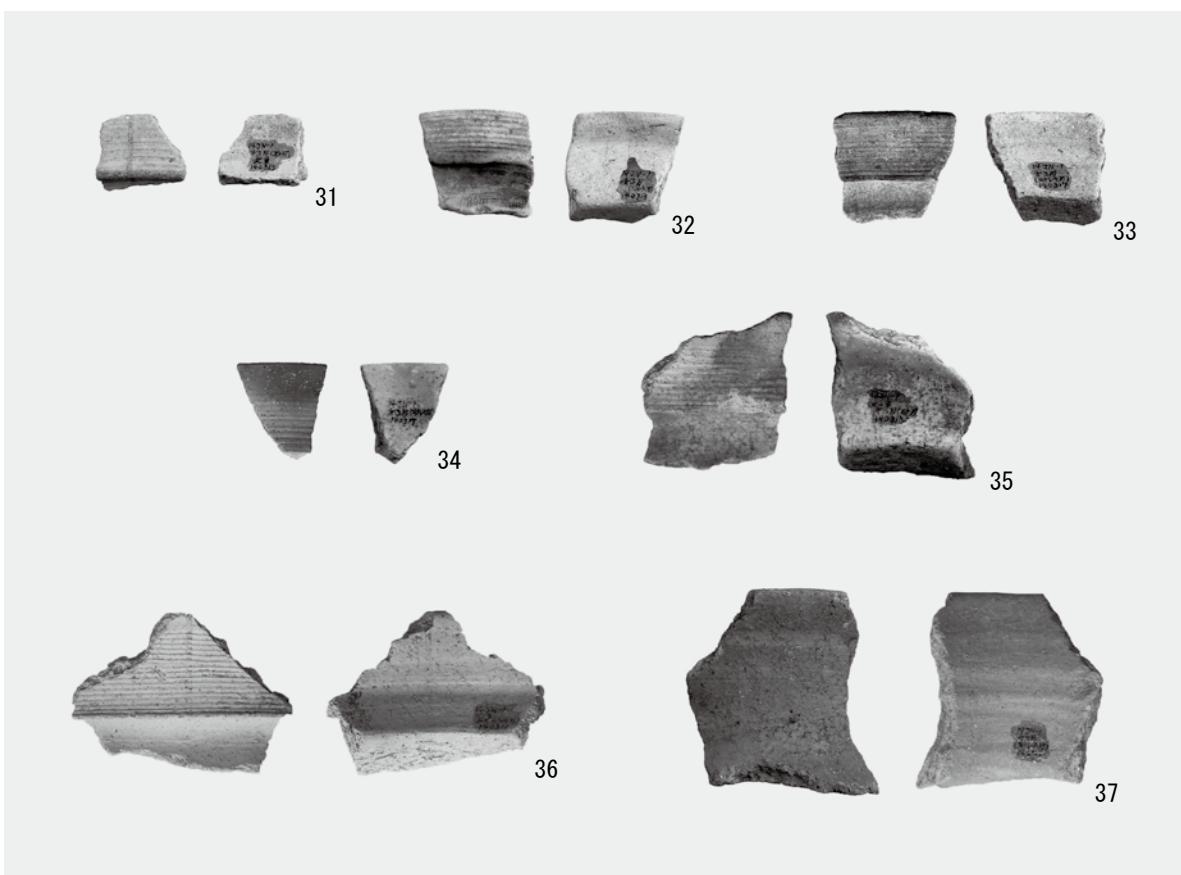
1 第3層出土遺物 (1/3)



2 同上 (1/3)

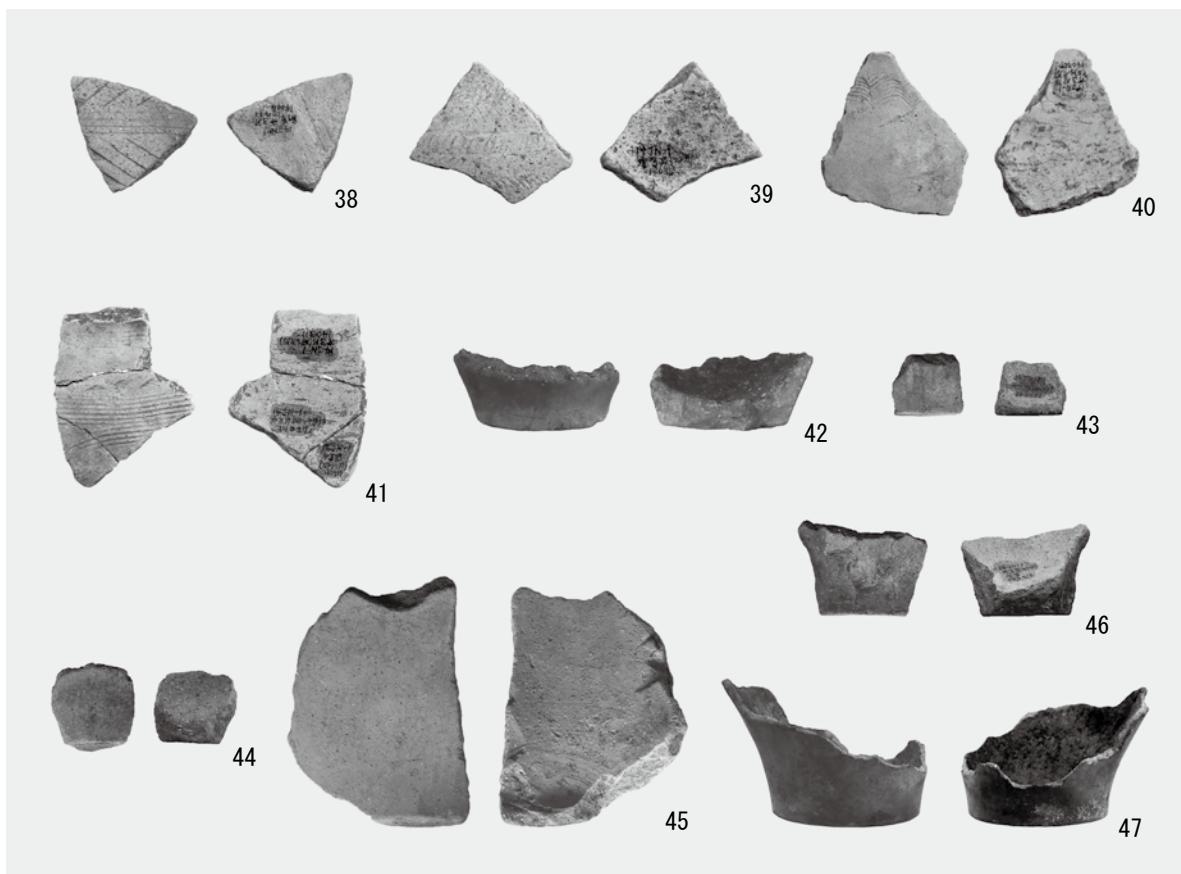


1 第3層出土遺物 (1/3)

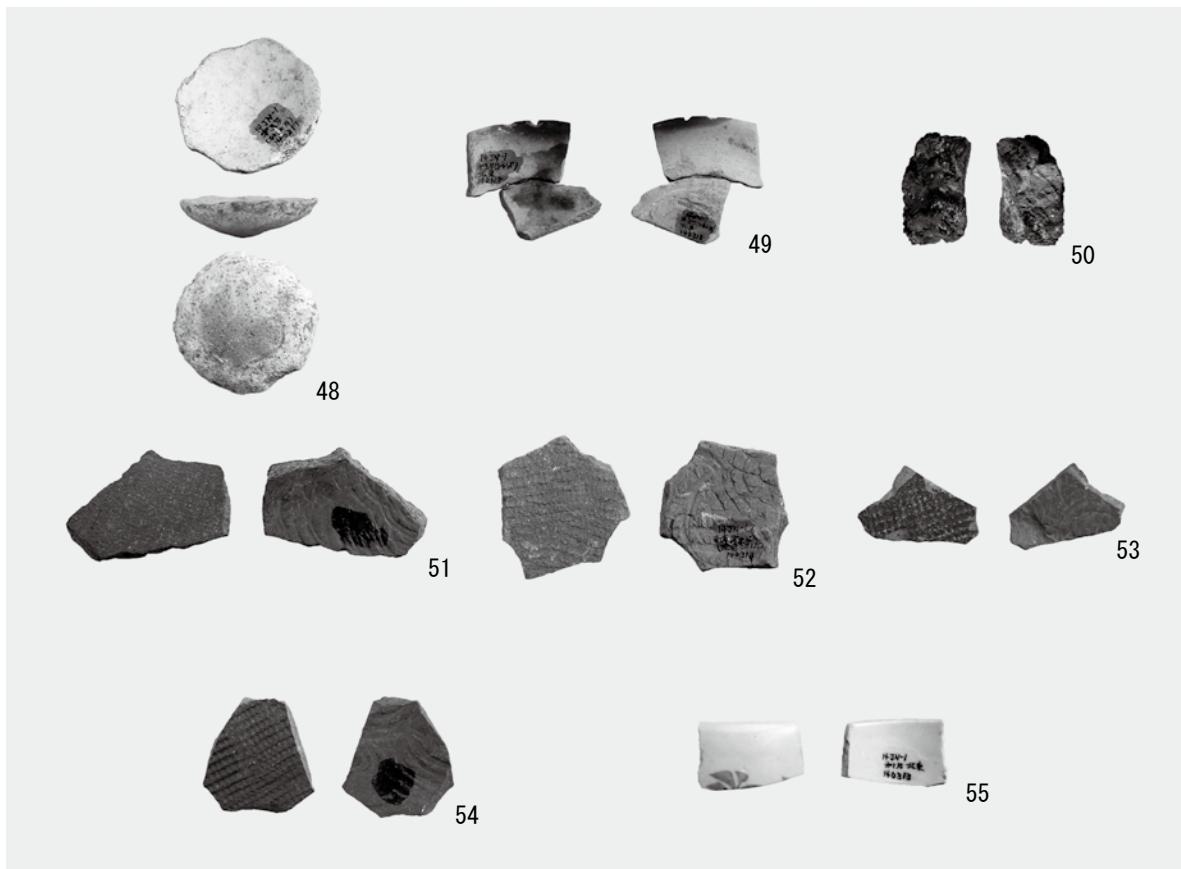


2 同上 (1/3)

圖版  
六  
遺物



1 第3層出土遺物 (1/3)



2 第1・2・3層出土遺物 (1/3)

## 報 告 書 抄 錄



## 寿昌寺西遺跡第1次調査

島根大学埋蔵文化財調査研究報告 第10冊

---

発行日 2018年11月30日

編集発行 島根大学 研究・学術情報機構 総合博物館

住所 島根県松江市西川津町1060

〒690-8504 TEL (0852) 32-6496

<http://museum.shimane-u.ac.jp/>

印刷

住所

---

